

「海の音〜サニクサタ〜」

作 涼海 風羽
りよらみ ふう

※無断での複製配布・商業利用および作品の品位を著しく損なう改変を固く禁じる。

「海の音くウミノウタく」

脚本・作詞：涼海風羽

【あらすじ】 将来に思い悩む少年江藤夏樹は、学校の夏休みを使ってある海辺の船宿にアルバイトに来ていた。

人混みに埋もれる街を離れ、豊かな自然に囲まれて過ごす夏樹の前に、不思議な少女が現れる。

海音という美しい少女は夏樹に優しく話しかけ、その歌声に、夏樹は心を奪われる。

夏樹が目指す将来の夢……それは「歌」で生きていく事だったから……。

夏樹と海音は共に時間を過ごす中でしだいに惹かれあつていく。しかし海音の正体は、村の夜を騒がせる「海辺の崖の幽霊」だった。

叶わぬ恋と知り悲しみに暮れる夏樹だったが、海音は人の心を動かす力「命の歌」を夏樹に託す。

夏樹は歌に想いを乗せて、彼女を空へと送り届ける。

ひと夏の淡くて不思議な経験をした夏樹は、夢を追い続ける誓いを胸に、街へと帰っていくのだった。

【登場人物】

- ・江藤^{えとう}夏樹^{なつき}……十七歳。歌と音楽が大好き。「街」からきた少年。優しく前向きな人柄で、気持ちがちがすぐ表情に出る。
- ・海音^{みお}……十五歳。非常に優れた歌の才能を持ち、故郷の海を愛している。天真爛漫な性格を丁寧な言葉遣いで隠している。
- ・大浦^{おおうら}勝治^{かつじ}……真っ黒に日焼けしたたくましい老人。海音の祖父。夏樹が働く「海の家」の店主で、陽気な一面もある。
- ・榎本^{えのもと}修一^{しゅういち}……迷惑な酔っ払い。「街」での日々に疲れ自暴自棄のすえ海に来た。「街」での立場は音楽業界の大手に勤める役員。
- ・友田^{ともだ}幸助^{こうすけ}……夏樹のクラスメイト。夏樹を海の家に送り込む。授業中によくメントスを食べてる。
- ・迫田^{せきだ}昇^{のぼる}……海音の歌に寄り集まってきた群衆の一人。生気が薄い。

【プロローグ】	(緩やかな時間を感じさせる。儂げな雰囲気)	
海音 1	はるかな空へ祈ります。さざ波のさうらう調べの中で。 やさしい気持ちが続きますよう。	詩を詠むように。やさしく、生命の底力を 空高く澄け込ませるように。 「愛する人がずっと幸せでありますように」
夏樹 1	風に求める私の歌を、乗せて、遠く。 あの歌が聴こえる。僕の愛する少女の歌が。 暗夜の星よ、さんざめく照らし続けよ。 僕をどうか導いてほしい。大海原を旅する標となりて。	「頼りない僕が夢を追う力を、君にどうか 分けてほしい。愛しているよ、いつまでも」
海音 2 (同時)	この声は、海のあなたに届いたでしょうか。	「いつもあなたを想っています」
夏樹 2 (同時)	この声は、海のあなたに届いたでしょうか。	
	(潮騒が響いている)	
【1：学校】	(学校の昼休み。二人の高校生が話している。 黒髪の少年は江藤夏樹。歌手を志望する17歳。 金髪の方はクラスメイトの友田幸助。夏樹に何かを説得しているようだ。)	劇中で明言されませんが、定時制高校です。 星の部に通っています。 夏樹と友田は入学当初は顔見知り。 二年になって友達になつたくらいの距離感。
夏樹 1	1カ月で15万!?	「な、なんだって——!!?」大仰に。
友田 1	うわっ、いきなり大声出すなよ!調整しろ、ボリューム!	
夏樹 2	驚くだろう、高校生のバイト代ってせいせい8万いけば良い方だ。	

友田 2	夏休み頑張れば、そんだけ貰える仕事なんだよ。	
夏樹 3	高校生がそんなに稼いで大丈夫なの？怪しい勧誘じゃないだろうな？	友田は人相がチャライので、夏樹はやや警戒
友田 3	ちげーよっ！ 親父んとこの知り合いが怪我したらしくてさあ。	しています。基本的には仲良しです。
	代わりの人手を探してるんだ。	
夏樹 4	だったらお前が行けばいいじゃないか。	
友田 4	彼女と旅行に行くんだ、スマン。	
夏樹 5	この野郎。	悔しい。
友田 6	まあ怒んなって！どうせ夏休み、暇してるだろ？	カラカラと笑ってなだめる。
夏樹 6	いや、夏休みは朝から晩まで勉強するに決まってるし。	「いや」はキツパリと。超見栄っ張り。
	オシャレなカッフエでバイトするつもりだし。	だんだん唇がひよつとこみたいになってきて
	俺も毎日彼女とデートする約束くらい入ってるし？	最終的に嘘丸出しの顔になってる。
友田 7	なんで目を逸らしながら言うんだよ。お前に彼女とかいないくせに。	夏樹は女の子と手つないだ事ありません。
夏樹 7	なんでバレた!？	
友田 8	バレバレなんだよ、お前の顔見てるどき。	
	本当、気持ちがなんでも顔に出るよな。嘘つけないよな、お前。	「でもスゲエ良い奴って俺は分かってるぜ」
夏樹 8	わ、わるかったな。	
友田 9	なあ頼むよ。こんな話は夏樹……お前にしか頼めないんだよ。	
夏樹 9	まったく。バイトつて田舎の海水浴場だろ？わざわざ暑い所で働かなくても。	
友田 10	いや、絶対お前のためになる。だってよ夏樹。夏の海はフアンタジ―だぜ？	断言。「誰もが浮かれる季節だ、ランチケン
夏樹 10	夏の海はフアンタジ―？どういう意味だよそれ。	狙える甘い蜜をお前も享受してみろよ」
友田 11	アバンチュールが待ってるかもって言ってるの。	

夏樹 1 1	アバンチュールウ？	「何それ美味しいの？」
友田 1 2	青春だよ青春！お前は17歳になって彼女も作らず歌ばかり作ってるだろ。それが勿体ないんだよ。これはチャンスだぜ。夏、海、都会から来た少年。お前みたいな冴えない奴でも、ひと夏の経験くらいできつだろ。	「歌手目指すんだったら恋愛の一つくらい経験しとけ。くそ真面目じゃつまんねーぞ」
夏樹 1 2	そんな無茶苦茶な！歌くらい好きに作らせてくれよ！	
友田 1 3	何事も経験だ！渚のお嬢さんの一人もとつ捕まえて男になれよ江藤夏樹！	「そおら、行ってこーい！」
夏樹 1 4	ええっつ！！	
友田 1 4	海辺のテラスのオシャレなカッフエで、お前の出会いが待ってるぜ！	勢いに乗せて背中を押す感じ。
夏樹 1 5	そんな無茶苦茶だろ！	次の舞台に放り出されるイメージ。
【2：海水浴場】	（夏らしい曲カットイン。海水浴客のガヤ。 路線バスを乗り継いで、峠をいくつも越えた先の小さな漁村の海水浴場。 青い空に白い雲。カップル、サークル、家族連れに、酔っ払い……。 海の家にはとにかく大勢集まっている。 店主の老人・大浦勝治の怒号も混じる。 賑わいの中で夏樹がわなわな震えだす。）	
夏樹 1	なにが海辺のテラス席だ……。なにがオシャレなカッフエだ……	もつと羨敵なビーツかと思つた。
勝治 1	なにが出会いが待ってるだ……。	「思つたのと全然ちがうやんけ」
夏樹 2	おらっ早く運べ夏樹！次が詰まってるんだよ！	
夏樹 2	俺の夏休みって……。	厨房から威勢よく声を飛ばす。

勝治 2	夏樹、5番テーブルのお会計！ 夏樹、2番テーブル食器下げて！	
夏樹 3	夏樹、7番さんがビールこぼしたあつ！ こんなはずじゃ無かつたあつ！ (雰囲気切り替わる。夕方に。)	「世界の中心で愛を叫ぶ」みたいな。 昼の喧騒から夕方の黄昏へ。 パッと画面が切り替わるように。
勝治 3	夏樹！	夏樹の叫びの余韻を断ち切るように、
夏樹 4	は、はい！ すみません！ 親父さん！	「夏樹！」
勝治 4	なんで謝ってるんだよ。今日はここらで店じまいだ。	謝るのが今日一日でクセになった。
夏樹 5	は、はあ……疲れたあ……。	おやじさん、人相は怖いけど情の温かい、
勝治 5	初日にはしては上々だ。お疲れさん。	ザ・昭和の親父な感じ。
夏樹 6	どうも……。	朝、到着して早々に夏樹を店に投入した。
勝治 6	ええと、夏樹……江藤夏樹って言ったな。十七歳か。	
夏樹 7	はい、高校二年です。	
勝治 7	若えなあ。こんな田舎に来ちまって。部活とか何かやってないのか。	村に若者は減って来てるから、夏樹がいると
夏樹 8	いえ、そういうのは。他にやりたい事が僕にはあるので。	ちよつびり嬉しいおやじさん。
勝治 8	ほお、何してるんだ？	
夏樹 9	歌です。歌が好きなんです、僕。だから将来はそっちの道に行きたくて。	
勝治 9	じゃあ自分で歌とか作るのかい。	
夏樹 10	はい。といつても、まだまだ世間じゃ無名です。たまに路上で歌ったり、 企業に持ち込みしてみしたり。なかなか夢ばかりじゃいけませんね。	夏樹は口ばかりでなく、 人並み以上の努力はしています。

勝治 1 0	まあ、世の中そんな上手くいかないだろうけどよ。若いのがわざわざこんな	歌に関して苦い記憶があるため、
夏樹 1 1	片田舎まで来てくれたんだ。今日から一か月間。明日もよろしく頼むぞ。	早めに話題を切り上げたかった。
夏樹 1 1	はい、こちらこそ、よろしくお願ひします！	爽やかに。
夏樹・モノ 1 2	<p>バスをいくつも乗り継いで、峠を何度も越えた漁村。</p> <p>そこは小さな海水浴場が広がっていた。行きついたのは古びた船小屋。</p> <p>海の家とのぼり旗には書いてある。</p> <p>古くて狭くて壁は潮で黒ずんでいる。そのくせお客さんはすごい数。</p> <p>店主の親父さんも、厳ついし……一カ月、ちゃんと働けるだろうか。</p> <p>それでも折角の海なんだ、作曲のヒントがあるかもしれない。よし頑張ろう。</p>	<p>物語のロケーションは福岡県糸島市の</p> <p>芥屋海岸あたりをイメージしています。</p> <p>夏樹は優男ながらも前向きな子です。</p>
【3：夜の海】	<p>(夜。月と星が眩しいほどに輝いている。草陰からは夜虫の声。</p> <p>げんなりした様子の夏樹がこつそり忍び出てくる)</p>	
夏樹 1	<p>ひええ……おやじさん、なんてイジキかくんだ。うるさすぎて眠れやしない。</p> <p>目が覚めちまった……仕方ない、散歩でもするか……。</p>	<p>街にいた頃もしばしば夜にジョギングしたり</p> <p>夜型生活を送っていた。</p>
夏樹 2	<p>わあ……さすがは田舎！すごい数の星だ。どれが星座かわからない。</p> <p>月もなんだか大きくないか？眩しいくらいだ。よおし砂浜まで行ってみよう。</p> <p>街灯もないのに足元に影ができてる。月明りでも影はできるのか。</p>	<p>実際に糸島の夜空はなんでもない時でも</p> <p>流れ星が十分間に五、六個見られます。</p> <p>空気が澄んでる田舎に来るのは滅多にない。</p>

<p>夏樹</p>	<p>波は静かで風が気持ちいい。 よおし、決めた。夜のこの場はコンサート会場だ。 さつそく、やりますか……………江藤夏樹、歌います！</p> <p style="text-align: center;">M 1 「あの星空の真ん中に」</p> <p>今夜だっておんなじ気持ち 変わることはない 気がつけば見上げている 君の姿を</p> <p>この胸のじれったさ 背伸びしてさえ届かない歯がゆさ 簡単にはいかないよ 僕が欲しいのは一個だけ 一等星 君さ</p> <p>星がきれいだ きれいだ 両手でいっぱい抱きしめたい どんな時でも描いてるんだよ あの星空の真ん中に</p> <p>星がきれいだ きれいだ 君こそが僕の目指す未来だ つながってる道をたどり あの星空の真ん中に</p> <p>光るものがあるから 手を伸ばし続ける 僕は追いつける 星空の真ん中に</p> <p>うああーっ！ もつと上に行きたあーい！</p>	<p>感動と興奮でみなぎってきた。</p> <p>歌の余韻で空高く夢を叫ぶ！</p>
-----------	--	--

夏樹 4	<p>(海音のコーラス「AH-AH-AH」が聴こえてくる)</p> <p>……なんだろう、この声は。どこかで誰かが歌っている……。</p> <p>……あの崖の上からだ。</p>	<p>幻想的な声だ……。人魚伝説かな……</p>
海音	<p>M 2 「さざなみのうた」</p> <p>心のなかに波が揺れた 波のゆりかご あなたに馳せる想いはいつも指先の向こう 星々を降らすあなたは夢 涙とたわむれ あつめた響きを希望にかえて 響きを希望に</p> <p>(「さざなみのうた」が続いている。</p> <p>間奏になる。夏樹は歌声をたどり、導かれるように浜の奥にそびえる海辺の崖までやって来ていた。美しい旋律に呆けていた夏樹のもとに、生気の薄い男・迫田が近寄る。)</p>	<p>迫田の正体は幽霊です。後述の「皆」も少女の歌に引き寄せられた幽霊です。</p> <p>季節は7月下旬。お盆の前。</p> <p>幻想的な風景に紛れ込んでいくような感覚。</p> <p>虚を突かれた。</p> <p>脱力した声。</p>
夏樹 5	<p>きれいだ……なんてきれいな歌声なんだ。僕は夢を見ているのか？</p>	
迫田 1	<p>君も聞きに来たのかい？</p>	
夏樹 6	<p>えっ、だ、誰？</p>	
迫田 2	<p>君も聞きに来たのかい、あの少女の歌を。</p>	

夏樹 7	は、はあ……。	誰だ、この人…？何言ってるの？
迫田 3	どうだ彼女、見事だろう。皆、毎晩あの歌を聴きに来るんだ。	脱力した声。皆↓ほかの幽霊。
夏樹 8	皆？	
迫田 4	彼女の周りにたくさんの人が見えるだろう……大人、子供、老人……。	※全員幽霊です。
夏樹 9	あらゆる者が毎晩ここに集まってくるんだ。	夏樹には、黒い人影の群れがもぞもぞ
迫田 5	あの女の子は、いったい誰なんですか？	動いているのがかろうじて見えています。
夏樹 10	行けばわかるさ。君はあの輪に加わらないのかい。	「君もこちら側においでよ」
迫田 6	い、いえ。僕は、ここで十分です……。	
夏樹 11	本当に素晴らしい歌声だ。あの声はこの世の嫌な事を忘れさせてくれる……。	夏樹の言葉など聞いてない。恍惚の表情。
	え、あつ、ちよつと！……行ってしまった……。	
	(歌になる)	
海音	波はたゆたうあなたを探して 風は吹いてく 水面を撫でて 星はきらめく朝陽にしらせる道標 若い明日はもうそばに 歌っています さざなみと笑み あしたをむかえて旅おえる かかえた未来 浜辺につめて 届けて 流れて はじけた泡の影に見染める 夜あけとともに夢は明く 新たな息吹をわたしは慕う ほら 見てよ あしたが	

夏樹・モノ12	(M2「さぎなみのうた」が終わる)	
夏樹13	聞いたことのない歌だった。誰が出してる歌だろう、綺麗な旋律、	「究極の美」を前にしたような虚脱感。
海音1	のびやかな歌詞、余韻が胸に残っている。それに、あの、澄んだ歌声……。	なんとか残った理性と歌への情熱で分析。
夏樹14	全身の力を抜かれるような……体を暖かい手で包まれるような心地だった。	なんて美しい声なのだろう……。
海音2	……彼女はいつたい……いつたい、誰なんだろう……。	ぼつりと。
夏樹15	私のことですか？	海音の初登場はひよつこりと。「呼んだ？」
海音3	ほえあ!?!き、君はさつきの歌の……!	コミカルに染つ頓狂に驚く。
夏樹16	こんばんは。星がきれいですね。	「意訳：やつほー♪(清楚)」
海音4	こ、こんばんは……ほかの人たちは？	おつかなびつくり。ドキドキ。超可愛い…。
夏樹17	もういませんよ。残っているのはあなただけ。	「みんな成仏させてきちやつた♪(清楚)」
海音5	ここにいたって、気づいていたの？	
夏樹18	ええ、もちろん。	「そだよー♪(清楚)」
海音6	……君はいつたい、誰なんだい？ おれ、いや……僕は、夏樹。	さつきの美声の持ち主が現れた…。
夏樹19	この海に今日来たばかりなんだ。ああ、だからここに来たのも初めてで……。	歌い手としての尊敬と畏怖。そして可愛い子
海音7	たまたま浜辺を散歩したら君の歌声が聞こえてきて、それで、ええと……。	へのドキドキで、自然と言葉が丸くなる。
夏樹20	夏樹さん、ですか？	「そう呼んでもいい？」
海音8	あ……うん。	「流れを止められた…」
夏樹21	私、歌が好きなんです。	「私の歌聴いてくれたよね♪」
海音9	歌が？	「うん、それ！その話がしたかった！」

海音 7	こうやって皆の前で歌って、皆がシアワセになれるのなら、私嬉しいんです。	「皆が笑顔だと、楽しいでしょ？」
夏樹 2 0	それ……伝わったよ！	
海音 8	えっ。	「ホントに!？」
夏樹 2 1	うん、その思い……すごく伝わってきた。なんだか元気をもらえた気がする。	
海音 9	本当ですか？	「ねえ、ホントに?ホントに?」
夏樹 2 2	本当だよ。きみの歌、すごく素敵だった。	
海音 1 0	嬉しい……ありがとございます！	「やったー!お兄さんナイス♪(清楚)」
夏樹 2 3	おっ。	
夏樹・モノ 2 4	顔が……近い……!! 目が大きい……!! なに緊張してるんだよ俺! もっと上手く喋ればいいじゃないか!	夏樹のプライベートゾーンは広めです。 海音のきらきらした瞳が至近距離に来て アガってます。
海音 1 1	あなたも歌が好きなんでしょう?	「お兄さんも上手だったねー!」
夏樹 2 4	わかるの?	「信じられん」
海音 1 2	聴いてましたよ、浜辺から届いてくるあなたの歌。とても素敵でした。	「あんな歌はじめて聞いたよ!感動!」
夏樹 2 5	いや、そんな、僕なんて。	「君の歌と比べないで:」
海音 1 3	本当ですよ。私、感じました。あなたの歌を想う気持ち。 歌が好きなんだってまつすぐな気持ち……私、あなたの歌、とても好きです!	「自信持ってよー。同じシンパシ!感じたよ」
夏樹 2 6	僕の歌を……好き?	「マジで?」
海音 1 4	はい!たしか、こんな歌でしたよね。	「だから一回聴いたら覚えちゃった♪」

夏樹・モノ 27	<p>そう言つて、真つ白な姿をした少女は、僕の歌を歌い始めた。</p> <p>遠くの浜でたつた一度、歌つていただけなのに歌詞やメロディは完璧だった。</p>	<p>この時は「俺の歌を歌ってくれてる」興奮。</p> <p>後から思うと「天才だった…」</p>
海音 15	<p>みおです！私の名前。海の音と書いて、海音つて言います。</p> <p>夏樹さんはどんな字ですか？</p>	<p>歌い終えた高揚感を残しながら。</p>
夏樹 28	<p>季節の夏に、樹木のキ……ああ、難しい方のキ。画数が多い方。</p>	<p>まだ彼女と上手くおしゃべりできない。</p>
海音 16	<p>夏樹さん。よく合っていますね</p>	<p>「素敵な名前♪」</p>
夏樹 29	<p>そうかな？君の方こそ似合っているよ。海の音なんてまるで君そのものだ。</p> <p>君の歌は本当にすごいよ。どこの誰にも負けないくらい。</p>	<p>街で活動してるライブルなんか目じやない。</p>
海音 17	<p>あの……もしかして、あなたは街から来ましたか？</p>	
夏樹 30	<p>うん。そうだよ。夏休みの間だけ、今日からその海の家で働いてる。</p>	
海音 18	<p>どうですか、この海は？</p>	
夏樹 31	<p>とても良いところだね。こんなにたくさんの星見たことないや。</p>	
海音 19	<p>でしょうでしょう！ 私、この星を見ながら歌うのが大好きなんです。</p> <p>波の揺らめきを聴きながら、臉を下ろすと、自然と音楽が生まれてきます。</p> <p>さつき歌っていたのも、そういう音色。</p>	<p>海音は感性的な歌のつくり方をします。</p>
夏樹 32	<p>じゃあ、君は、歌を自分で作っているのかい？</p>	
海音 20	<p>ええ。小さいころから、よく。</p>	<p>「というか、毎日やってるかな？」</p>
夏樹 33	<p>すごいや……ねえ、もつと聞いてもいい？</p>	
海音 21	<p>もちろん！</p>	<p>「いよいよ♪」</p>

夏樹・モノ34	<p>彼女の話は、歌と海の二つだった。彼女は海の話をして聞かせてくれた。</p> <p>海音の言葉の端々からは、この海が本当に好きなんだと伝わってきた。</p> <p>ああ、もちろん。歌の話も思い思いに語り合えた。</p> <p>海音は目を輝かせて楽しそうに話してくれる。どんな歌が好きかを聞くと、知らない曲名をいくつか挙げた。どれも初めて聞くものばかりだった。</p>	※生きてた年代が微妙に違うため。
海音22	夏樹さんは、どんな歌を書いていますか？	
夏樹35	誰かに元気を届けられる歌、それを目指してずっとやってるよ。	
海音23	ふふ、じゃあ、私と一緒にですね！	「やったー！お兄さんなかまー！（清楚）」
夏樹36	そうだね。もつとたくさんの人に僕の歌を伝えたい。君と同じだ。	
夏樹・モノ37	……子どものように笑う子だなあ……。	ぼつんど。
海音24	夏樹さんって、よく笑う人ですね。	「すごいねえ」
夏樹38	……そうかな？	同じこと考えてた。
海音25	あの……海音って呼んでください。私、夏樹さんともつとお話したいです。	「ねえねえ、友達になろうよ！」
夏樹39	（おずおずと）わかった……ええと……海音。	「じゃ、じゃあ失礼して…はい」
海音26	（微笑を浮かべて）夏樹さん。	「わあい友達できたあ♪」
夏樹・モノ40	<p>海音は不思議な少女だった。ぎこちない気持ちの俺を自然に喋らせてしまっ。</p> <p>おかげで時間が緩やかだ。この日の夜は月が動いていく速さも忘れて、</p>	ゆつくり緊張がほぐれてきた。

夏樹 4 1	ひたすら語り合っていた。	
海音 2 7	いけない、こんな時間だ。	
夏樹 4 2	どうしました？	
海音 2 8	明日もバイトの時間が早くつて。そろそろ帰らないと。	親父さんにとやされるかも。
夏樹 4 3	そうですか……どうか気をつけて帰ってくださいね。	「ふう…さびしいなあ」
海音 2 9	ありがとう。海音、君こそ家はどこなの？よかつたら送るよ。	
夏樹 4 4	いいえ、私は迎えが来るので。	「正体を明かすのもまだ惜しいかな」
海音 3 0	そうなんだ、じゃあ行くね。楽しかったよ。	
夏樹 4 5	こちらこそ、夏樹さんとお話しできて良かったです。	
海音 3 1	そうだ………なあつ、また明日もつ、君の歌を聴きたい！	走つて、立ち止まつて、振り返る。
夏樹・モノ 4 6	ふふつ、私はいつでもここにいますよ。	「ずっとここで待ってるよ」
【4：海の朝】	満天の星空の下で髪をなびかせる彼女は、やはり美しかった。 今夜は素敵な出会いだつた。俺の夏が始まつた。高ぶりが胸を躍らせる。 こんな日々が続くなら、いい夢をきつと見られそうだ。	
勝治 1	(翌朝。美しい少女の歌声を夢でも聞いていた夏樹の耳に、 勝治の野太い怒声が轟く。)	
	起きろおおっ！いつまで夢見てんだ！！	

夏樹 1	はっ!?!ふああいつ!?!朝!?!	コミカルで素の頓狂に。「火事ですか!?!」
勝治 2	やつと起きやがった。はやく仕事の支度しろ!	
夏樹 2	もうそんな時間……つて、まだ六時前じゃないですか!	※午前5時45分。
勝治 3	始発のバスでお客さんが来るのは八時過ぎだ。早けりや七時に来る人もいる。 買い出し、掃除、料理の仕込み、やることは沢山あるぞ。	
夏樹 3	あ、朝早いんですね……海の家つて……。	な、なんてことだ…(ぷるぷる)
勝治 4	客商売はそんなもんだよ。……分かったらさつさと顔洗つてこい!	「分かったら」蹴飛ばすような声色で。
夏樹 4	は、はいっ!	
夏樹・モノ 5	蹴飛ばされるような大声で俺の一日が始まった。 空には太陽すら昇つてないのに、俺の心拍数は天井を打つ。 おやじさんは怖い人だ。白髪頭の日焼け肌。腕は丸太みたいな大きさと、 眼ヂカラが強い。海の男を通り越して、あれは海の荒くれ者でまちがいない。 俺はおやじさんの機嫌を損ねないよう、素早く身支度を整えて、 あくびを必死に抑えながら、箒を片手に店の表へ出て行つた。	
【5:大賑わい】	(ミンミン蟬の声。どやどやと海水浴客がご到着。)	場の空気を換えるようなシーン転換。 大勢の来店客。
勝治 1	そおら、今日も仕事だ仕事!夏樹いつ、注文取つてこーい!	このシーンはテンポがよくいきます。
夏樹 1	は、はいっ!	

夏樹・モノ 2	夏の海は大賑わいだ。息つく間もなく押し寄せてくる人の波。 海の家には色んな人がやってくる。	
勝治 2	夏樹いつ！あの酔っ払いを止めてこい！	厨房から呼びかける。
夏樹 3	はい！……すみません！踊りだすのはやめてもらっていいですかー！	合点承知！
勝治 3	夏樹いつ！焼きそば大盛り青のり三倍、七番席に持っていけ！	厨房から呼びかける。
夏樹 4	はい！……お待たせしました！青盛りです！	合点承知！
勝治 4	夏樹イツ！あのアベックをつまみ出せえつ！	厨房から呼びかける。長く居座られている。
夏樹 5	はい！……すみません！さつさと海に沈んで来いやあ！ やりました、おやじさん！6番さんお帰りです！	合点承知！私怨も混じってる。 ずがずがしい気持ち。
勝治 6	でかした夏樹！次のお客さんをお席に通せえ！	
夏樹 6	はい！6番席に4名様入られます！ラムネ3本、オレンジが1！ かき氷がAからDまで練乳全部プラスでえすつ！	
勝治 7	へいらっしやい！	
夏樹 7	大変です！2番席のお子さんが水鉄砲を乱射してます！	非常事態発生！
勝治 8	よっしゃ、夏樹、とめてこい！	
夏樹 8	わかりましたあ！	合点承知！うおおー！！！！
夏樹・モノ 9	この喧騒が、俺の昼間の日常茶風景。 ……こういう生活がしばらく続くと、ちよつと人嫌いになりそうだ。	数日後。

【6：心の響き】	(夜。潮騒が響いている)	
夏樹・モノ1	夜だけが、俺の心のよりどころ。今夜の星も輝いていた。 ……歌声が聴こえる。	穏やかな気持ち。落ち着くんだよね。 瞳を閉じて聴くように、
海音1	(コーラス AH-AH-AH)	
夏樹2	星がきれいですね。	「おつすし、今日もやってるね」
海音2	あ、いらっしやい!	ちよつと親しくなった。「今夜も来たのね!」
夏樹3	また新しい歌を作ったのかい?	「海音の歌、いつも楽しみにしてるんだよ」
海音3	夏樹さんの歌から新しい感覚をもらって、私なりにアレンジしたんです。	
夏樹4	それが今の歌かあ。海音、君はやっぱり凄い子だな。	
海音5	夏樹さんのくれる発想が私にたくさんの世界を見せるんです。	「夏樹さんがすごいんだよ!」
夏樹5	そんな大げさな。	照れながら。
海音6	夏樹さん、またあの話を聞かせてください。	「この話がしたくて待ってたんだよ!」
夏樹6	あの話つて、街のことかい。	
海音7	はい!夏樹さんの住んでる街に生きてる人はどんな音楽が育てているのか、私、気になるんです。	
夏樹7	人を音楽が育ててる、海音らしいや。	「そんなの考えた事なかった、君はすごいや」
海音8	私は生まれてからずっとこの海で暮らしています。 私の音楽はすべて海が教えてくれたんです。	
夏樹8	海が教えてくれた歌か……どうりで。	

海音 9	何がですか？	
夏樹 9	自然界には人の心に響きやすい音があるんだ、焚火の音とか、心臓の音、 そこそ波の揺れる音とか。	※専門的には「自分の「ゆらぎ」と言います。
海音 1 0	海音の歌声もきつと、体に沁み込んでいるんだよ、海の音が。	
海音 1 0	海の、音？	「その名前って……」
夏樹 1 1	だから君の音楽は……。	
海音 1 1	(台詞を食って) 海の歌！	
夏樹 1 2	それだ！	正解！
海音 1 2	えへへ、自分の名前とちよつと似ていて少し照れるな。	ほつぺたほりほり。
夏樹 1 3	あはは。	「やべえ、かわいい……」
海音 1 3	夏樹さんは街で、どんな歌を作っていましたか？	明るく。
夏樹 1 4	そうだな、たとえば、こんなの。	
夏樹	M 3 『デュエット』夏樹ソロ 僕が笑っていたいのは きつと明日も笑うため いつか晴れる日が来るから きつと大丈夫だよ ぬくもりを上げよう 僕は雨の空でも君とつながろう その手を	
夏樹 1 5	……ふう、どうかな？	
海音 1 4	これが……街が育てた夏樹さんの歌なんですね。素敵ですつ。	「ほわああああ……！」拍手パチパチ！
夏樹 1 6	よかつたあ。	「気に入ってもらえたあ……」

海音 1 5	夏樹さんはたくさんの歌を聴かせてくれます。	「本当にすごいや」
夏樹 1 7	(笑って) まあね。	「だって歌が好きなもの」
海音 1 6	夏樹さんの歌は、心の温度が音に乗って、空に飛んでいくみたいです。	
夏樹 1 8	どういう意味だろう。	「???」
海音 1 7	何というか、顔を上げたくになります。	
夏樹 1 9	か、顔を？	「どゆこと??」
海音 1 8	夏樹さんの歌は、空の高さを教えてくれるんです。	海音は歌のイメージをすべて映像から
夏樹 2 0	空の、高さ……？	ビジュアル化して作詞作曲しています。
海音 1 9	たくさんの人がいる中で、精一杯に輝こうとする。星のような歌です。	「夏樹さんってキラキラしてるもん♪」
夏樹 2 1	そんなに輝いてる？ 僕ってば？	ちよつと調子に乗っちゃう。
海音 2 0	(素直に) 輝いてますよ。	あつけらんかと。
夏樹 2 2	んえ。	だしぬけに肯定されて変な声が出た。
海音 2 1	夏樹さんって、歌ってる時が一番楽しそうにしています。	
夏樹 2 3	まあ……そうかも。	後頭部をボリボリかく感じで。
海音 2 2	でしょう？	
夏樹 2 4	僕、自分に自信がないからさ。昔っから不器用でなんでも上手くいかなくて。	夏樹は引っ込み思案な幼少期だった。
海音 2 3	でも歌は……歌だけは不思議と好きが続いて、僕の言葉に出せない気持ちを、	周囲への劣等感をバネにして前向きな曲を
夏樹 2 5	歌でなら解放できるんだ。	創り続けている。
海音 2 4	歌があなたの居場所なんですね。	
夏樹 2 6	そうなんだ。僕には歌しか無い。そして僕と同じような気持ちを抱えた 人たちに、君は一人じゃない、一緒に頑張ろうって応援する歌を作ってたい。	夏樹という若者の、弱さを認めた「強さ」。 本心で動いている故のまっすぐさ。

海音 2 5	夏樹さん……。	「頑張る人って、かつこいいなあ」
夏樹 2 7	夢があるんだ。	
海音 2 6	どんな夢ですか？	
夏樹 2 8	歌で世界を回ること。世界のいろんな国を回って、色んな音楽に触れるんだ。 歌って言葉が通じなくても、相手に気持ちを伝えられる一番の方法だって 思ってるから。	歌で生きていく事のさらに先にある展望。 音楽で人と分かり合いたい。
海音 2 7	音楽に国境線はない、そういうことですね。	「すっごーい！」
夏樹 2 9	そういうこと。だから僕はもつと心を動かせる歌の力を身につけたいんだ。 上に行きたい。	未来に希望をもって。 「上に行きたい」するりと決意表明。
海音 2 8	上に……。	胸にチクリ。…自分にそんな未来はない。
夏樹 3 0	そのために今、街で頑張ってるわけだけど。まあ今は一瞥の通りつて感じど。	ちよつと苦笑。
海音 2 9	いいえ、夢を語れるって素敵だと思います。夏樹さんの歌、私は好きですよ。	「そんな事ないよ！かつこいいよ！」
夏樹 3 1	ははは、ありがとう。海音こそ、もつと聞かせてくれよ。君の夢についてさ。	
海音 3 0	私は……いまこの瞬間に歌える歌が、すべてです！	「…私の夢には触れないで」
	☺ 「あの星空の真ん中に」 BGM	
夏樹・モノ 3 2	そう言つて歌いだした海音の歌は、僕の書いた歌だった。 けれど、彼女の表現力から紡ぎだされる旋律は、僕が言い表せる世界とは まったく違う色をしていた。夜空に響く海音の歌。 星空を背負つて歌う少女の姿は、まるで1枚の絵画を見ているようだった。	

海音 3 1	そうだ！夏樹さん、お願いがあります。聞いていただけますか？	
夏樹 3 3	どうしたの急に？	
海音 3 2	歌を、作ってください。	決意。「私が生きた証、この人になら…」
夏樹 3 4	歌を作る？君にかい？	
海音 3 3	はい。	
夏樹 3 5	いきなりだね、どうしてだい。	
海音 3 4	夏樹さん、もうすぐ街に帰ってしまうのでしょうか？ だから思い出が欲しくって。	
夏樹 3 6	夏休みだけのバイトだからね……たしか、まだ10日はいるよ。	
海音 3 5	お願いします！ 夏樹さんの歌を歌わせてください。	本気で言う。
夏樹 3 7	お、おお……。	押しが強くてびっくり。
海音 3 6	……嫌、ですか……？	本気だからこそその不安。
夏樹 3 8	そんなことはない！……わかった。作ってみるよ。	女の涙に弱いタイプ。
海音 3 7	わあ……っ、ありがとうございます、ありがとうございます！	嬉しい！
夏樹 3 9	といつても、テーマは何だい？	
海音 3 8	ここです。この、海です。	
夏樹 4 0	じゃあ、海で感じたことをそのまま音楽にするってイメージか。	
海音 3 9	はい。夏樹さんはいつも何を感じていますか？	
夏樹 4 1	うーん……いびき。	
海音 4 0	え？	

夏樹 4 2	下宿先のおやじさんのいびきで……眠れない夜を過ごしてるんだ。	とても神妙に。
海音 4 1	もうっ、まじめなお願いなんですよっ！ ……ぶっ、ぶっ。	ちよつと怒る。でも嬉しさの方が今は大きい。
夏樹 4 3	はははっ。	
海音 4 2	……♪ぼくが笑っていたいの、きつと明日も笑うため。	「デユエット」言葉じゃ表せない気持ちを
夏樹 4 4	いつか晴れる日が来るから。	歌として昇華させる。喜びに満ちて。
2 人	きつと大丈夫だよ。ぬくもりをあげよう	
夏樹 4 6	……♪ぼくは雨の空でも、きみと繋ごう、その手を。	
海音 4 4	気に入ってくれてるね。	明るく、元気に。
夏樹 4 7	素敵ない曲、お願いします！	自信に満ちて。
夏樹・モノ 4 8	俺が言うと彼女は笑った。つられて俺も照れ笑いした。ああ楽しい。	
	海音が笑ってくれるなら、頑張れそうだ。	
	雲が薄くかかり始めた半分の月が昇る空を見上げて、そんな風に思った。	
【7：酔っ払い】	(盆休みも過ぎ、客足の減った海の家。空にはトンボも飛び始めている。 勝治が鼻歌を歌いながら食器を洗う。 店の奥では榎本修一が酔い潰れて寝ている)	午前二時ごろ。
勝治 1	♪ふんふん。油汚れにやミカンの皮。 女手ひとつで息子を育てたお袋ちゃんの知恵袋。	歌っている。

夏樹 1	おやじさん、買い出し行ってきました。	「ただいまー」くらいの感じ。
勝治 2	おう、早かったな。	「おかえりー」
夏樹 2	何の歌ですか、それ？	
勝治 3	おい、聴いてたのかよ	焦る。「マジで!？」
夏樹 3	めちやくちや聴こえてましたよ、店の外まで。	
勝治 4	ちきしょう、今まで村の連中だれも教えてくれなかったぞ。	「恥ずかしいなオイ!」
夏樹 4	評判いいんじゃないですか？良い声してますもん。さすがは漁師。	
勝治 5	荒波に揉まれた船乗りだぜ。蚊の鳴くような声で嵐の海を出られるかてんだ。	照れ隠しの見栄張り。
夏樹 5	今歌っていたのは、漁師さんの歌ですか？	
勝治 6	ちげえよ。俺の、おりじなるそんぐだよ。	慣れないカタカナ語。
夏樹 6	おりじなる、そんぐ……？	
勝治 7	お前、いつも夜遅くに出歩いてるらしいじゃねえか。	
夏樹 7	ぎくつ。	
勝治 8	毎晩こそこそ出歩きやがって……どこに行つてんだ？	
夏樹 8	ええと、その。ちよつとそこまで。	
勝治 9	そこつて海しかねえぞ。	
夏樹 9	あつ、そうですねっ！そうですねっ！あはははははは……はい……。	
	勝手なことして、すみませんでした！	
勝治 10	いや別に謝れとは言つてないんだが……。	「そんなペコペコせんでも…」
夏樹 10	はい？	
勝治 11	毎晩そこらへんで歌の練習してんだろ、クソ真面目なお前のことだから。	ここは昭和の親父のツンデレです。

夏樹 1 1	熱心もいいが、あんまし夜更かしすんなよ。潮風浴びると風邪引くぞ？	「え、優しい…！」
勝治 1 2	あ……ありがとうございます。	夏樹の好青年ぶりには好感がある。
夏樹 1 2	それにしても表情豊かだな、お前。すぐに顔に出るよなあ。	「どうにかならないもんですかねえ」
勝治 1 3	よく言われます。嘘とか冗談は結構苦手。	「やれやれ」そして、釘を刺すように。
夏樹 1 3	なににせよ、無茶はするなよ。あと、海辺の崖には近づくな。	「いつも行ってるなんて言えない」
勝治 1 4	……？ なぜですか？	「行くなよ。幽霊にさらわれるぞ」
夏樹 1 4	危ないからに決まってるだろう、絶対に行くなよ。	「やけに押すなあ」
勝治 1 5	は、はあ……。	リエゾン。「分かったならいいんだ」
夏樹 1 5	ほら、買ったたもん奥にしまつとけ。仕事だ仕事。	
榎本 1	はあい。	空気を破るように。酔酩している。
夏樹 1 6	ははははは！ ずいぶん素直じゃないか、君い。	
榎本 2	え、誰ですかあなた。	
夏樹 1 7	(しゃっくり) なあ大将の話ちゃんと聞いてたか？	酔酩している。呂律も危うい。
榎本 3	よく考えてみろ、大人が子供にダメつていう理由をよ？	小僧に説教してやろう。
勝治 1 6	大概見られたくないウラがあるからに決まってる！	
夏樹 1 7	うっ……酒臭い……だいぶ飲んでるなこの人。	
榎本 3	んま、誰かやらかすと思つたんだよ、あんな場所。	酔酩。気が大きくなっている。
勝治 1 6	フツ―考えりやまず行かねえもんな。	
榎本 4	ちよつとお客さん、ウチのモンに絡まれちゃ困りますよ……。	
夏樹 1 7	夏樹、お前は相手にしなくていい、下がってる。	
榎本 4	ま、そもそも辺鄙な田舎さ。これくらい話題性のあつた方が客を呼べるし、	酔酩している。

夏樹 1 8	金も儲かる。	「おとなしく言うこと聞いとうら…」
榎本 5	……俺、奥に行ってます。	すれ違いざまに手を掴む。
夏樹 1 9	まあ待ちなつて！（夏樹の手を掴む） （掴まれた）うわつ。 （食器が落ちて、割れる音）	
榎本 6	ちつ、やつちやつたあ。んだよ、誰だよこんな所に置いたやつ。 大将、この皿、いくら？	酔酩している。責任感ゼロ。他人事。 弁償すりゃいいんだろう？
夏樹 2 0	あの、まずは謝るのが先じゃないですか。	適当な態度にカチンと来る。怖気ながらも。
榎本 7	あ？	「なんだ小僧？」
夏樹 2 1	それにこの海は、素敵なところですよ。悪く言わないでください。	
榎本 8	こんな潰れそうな船小屋の小僧が、この私に意見するのか。	自分はそうしてのし上がってきた。
夏樹 2 2	なんだと！	引け目もある。
榎本 9	出る杭は打たれるよ少年、綺麗事を言うのなら力を持つてからにするんだね。 金がなけりや何をする、何ができる？所詮この社会はな、金の動きの読めねえ奴から夢も語れず負けてくんだよ！ 最近の若い奴は世間知らずだからな。ここは一つこの海のウラとは何か教えてやるよ。この海にはな……幽霊がつ！ 幽霊が出るつて噂なんだよつ！	両手を広げて大々的に宣伝！参ったか！
夏樹 2 3	……は？	「ふざけているのか？」
榎本 1 0	ちよつと昔、崖から落ちて死んだ人間がいるらしいからな。	調子こいて言いふらす。

	一部じゃ有名な話だぜ、それに噂のおかげでこの海は知る人ぞ知る……。	
	(テーブルに伝票をたたきつける音)	
勝治 1 7	……お客さん……お会計は、三千四百円です。	ドス。「いい加減にして。さつさと出てけ」
榎本 1 1	ひいっ！	震えあがる。
勝治 1 8	よろしいですね？	「さつさと出てけ」幽霊話を馬鹿にするな。
榎本 1 2	お、おう！いくらでも払ってやるよ！釣りはいらねえ！二度と来るかつ！	虚勢を張りつつ。
	(走り去る音)	
夏樹 2 4	おやじ、さん？	呆然。おやじさん怖かった。
勝治 1 9	……わーい！ お仕事お仕事るんるんるーん♪	場の空気をごまかすように。バカ明るく。
夏樹 2 5	おやじさん……？	よくわからない。
勝治 2 0	ジョーダンだよ、ジョーダン！ ……今のは俺の、ひつさつわざだ。	わざと明るく振舞う。
夏樹 2 6	冗談にしては恐ろしすぎです……。	
勝治 2 1	驚かせて悪かったよ、たまにいるだろ、あーという面倒なの。忘れる忘れる。 ホラッ、良いから仕事だ！ 洗い物がたまってるぞっ。	幽霊の正体は、死んだ自分の孫娘。 他人に干渉されたくなかった。
夏樹・モノ 2 7	それから俺は仕事に戻った。この日もそれなりにお客さんは入ったが、 初日に比べてだいぶ少なくなってきた。酒飲み客には気も付けよう。	

<p>【 8 : 命の歌】</p> <p>海音 1</p> <p>夏樹 1</p> <p>海音 2</p> <p>夏樹 2</p> <p>海音 3</p> <p>夏樹 3</p> <p>海音 4</p> <p>夏樹 4</p> <p>海音 5</p> <p>夏樹 5</p> <p>海音 6</p> <p>夏樹 6</p> <p>海音 7</p> <p>夏樹 7</p> <p>海音 8</p>	<p>そういえば、あの後酔っ払いを追い返したおやじさんの拳が震えてたように見たのは、気のせいだったんだろうか。</p> <p>どうしました夏樹さん？</p> <p>うわっ。びつくりした。</p> <p>なんだか考え事してたみたいで……疲れてますか？</p> <p>いや、そうでもないよ。</p> <p>ふうん。……あ、そうだ！ 歌はできましたか？</p> <p>もうちよつと待ってて。まだ昨日の話だよね、それ？</p> <p>ふふ、冗談ですよ。でも楽しみにしていますからね！</p> <p>ああ、頑張るよ。アイデアはいくつか浮かんでるんだ。</p> <p>へえ、どんな歌になるんだろうなあ。</p> <p>まあ、楽しみにしててよ。</p> <p>はい！ 夏樹さんの歌って、歌ってて元気が出ますもん。</p> <p>嬉しいなあ。</p> <p>そうだ夏樹さん……生の歌と、死の歌ってご存じですか？</p> <p>なんだい、それは？</p> <p>私思うんです。歌には特別な力があるって。聞いた人を元気つけたり、生きていこうとする力を与えるもの……それが、生の歌。</p>	<p>顔をのぞくようにひよっこりと。</p> <p>驚いて顔を上げる。考え事してた。</p> <p>「ねえねえ、まだあー♪」</p> <p>締切に追われた作家がよくやる言い訳です。</p> <p>「ねえねえ、知ってる？」</p>
---	--	--

夏樹 8	じゃあその反対となると、気持ちを穏やかにしたりするってこと？	
海音 9	やがて人を死なせる歌です。	声のトーンを少し変えて。空気を変える。
夏樹 9	人を死なせ……って、そんな歌があるというのかい。	「なんて事言ってるの！」
海音 10	たとえば、いつも元気な人が落ち込んでいるとして、それを励ましたい。 そんな時に聞かせるのが生の歌。	
夏樹 10	ふむふむ。	
海音 11	では、もう助からない人に贈るものは？	
夏樹 11	(ハツとする)	
海音 12	心安らかに最後の時を迎えたい、そう願う人のためにある歌が、死の歌です。	
夏樹 12	海音はどちらが良いと思うの？	
海音 13	選べません。人の命に優劣をつけてはいけないように、 歌が持つ役割に良いも悪いもありませんから。夏樹さんは？	
夏樹 13	僕にとってもそうだと思う……いや、どつちで在りたいかって言われたら、 それは、僕は生の歌で、皆を元気にしたいとは思っているけど……。	
海音 14	私にとってはそうですよ。	微笑を浮かべて。
夏樹 14	海音？	
海音 15	迷わなくたっていいんです。迷ってたっていいんです。 生きてる事が歌なんですから。	微笑を浮かべて。
夏樹 15	生きてる事が歌って？	
海音 16	あなたがどんなに葛藤してても、あなたが道を進む姿に、 誰かが元気づけられている。	得意げに。

夏樹 1 6	……一人じゃないよ。歩いてゆけばいつか会えるぞ。	自分の歌の歌詞だと気づく。
海音 1 7	幸せになれるへんてこ影法師。	
夏樹 1 7	夏樹さんの歌詞ですよ。夏樹さんも分かっているじゃないですか。	
海音 1 8	どうやら、そうらしいや。	
夏樹 1 8	(くすくすと笑い声) 私にとって夏樹さんの歌は生の歌です！	
海音 1 9	ははは、ありがとう……。じ、実は僕も……。	「君と同じ気持ちだよ」言いそびれた。
夏樹 1 9	(歌声) 夏樹さん、さあ、歌いましょう？ (歌う。)	聞いてない。
	アララ……。	「ダメでした」
	(不穏な気配。夏樹が気付く。)	
夏樹 2 0	あれは……？	崖の上に人影。幽霊か？
海音 2 0	どうかしました？	
夏樹 2 1	崖の上に……誰かが……ゆつくりと歩いて……はっ (ハッと気づく)。	幽霊じゃない、人間だ。
	海音、ごめん！ ちよつと行ってくる！	あんなところで何をしている！
	(全速力で駆ける。風を切る。)	
榎本 1	(夢遊病のようにぶつぶつと何かを歌っている) ……もうすぐ、そこへ……。	何かにいざなわれている。崖の先端へ。
夏樹 2 2	何やってるんですか！ 危ない！	飛びついて踏みとどまらせる。
榎本 2	うっ！	

夏樹 2 3	(抱き寄せて、引き倒す)	
榎本 3	(荒い呼吸) 何やってるんだよ……何しようとしてたんですか、おじさん！	全力で走り、70キロの人間を投げ飛ばした。
夏樹 2 4	ああ……うう……君は……さつきの海の家で働いていた……。	あちこちをぶつけた。呻き。
榎本 4	どうして、靴なんか脱いで！ こんな崖の上で！	ショッキングな出来事に気が立っている。
夏樹 2 5	あなた、自分のしようとしてた事、分かってるんですか……？	
榎本 5	……見りやあわかるだろう。崖の上から自分をぼーいだ。	あたかも他人事。
夏樹 2 6	ふざけるな！	
榎本 6	そんな大声出さないでくれ、分かったから落ち着きな。	「頭がガンガンする」
夏樹 2 7	いつまで俺に抱き着いてるつもりだよ。	
榎本 7	……おじさん、ヤケ酒ですか、さつきの。	
夏樹 2 8	生きてりや死にたくなるものさ。人生疲れたつて言い続けて早ウン十年。	狂言回し風に自分語り。
榎本 8	いよいよつて時が来たと思えば、どこぞの者とも知れない少年に止められる。	
夏樹 2 9	ほおらやつぱり人生上手くいかないものだねえ。	
榎本 9	おじさん、街の人ですよ。	身なりから判断。
夏樹 3 0	一般的な一般企業の一般的な会社員。ただまあちよつと仕事できたモンで、	
榎本 3 1	他人の人生を左右できる立場になつちやつてたり、なかつたり。	
夏樹 3 2	そんな人が。	
榎本 3 3	私は君より飯を食つてる。何十年も多くね。	「若者にはわからないだろうねえ」
夏樹 3 4	……おえらいさん、ですか。	

榎本 9	その呼び方はよしてくれ。私はそんな人間じゃない。……ちよつとだけ疲れ てたのさ。誰もいない旅がしたくて……先日、街からここに来た。飲める だけの酒を飲み、自由に振る舞つてやろう。そんなつもりでここにいた。	
夏樹 3 0	はつきり言つて迷惑です。	
榎本 1 0	正直だね君。 酒を飲んで気を大きくした私は、あれから外をあてもなくぶらついていた。 大きくなったのは気持ちだけじゃない。ぼんやりとした不安も共に膨らんだ。 疲れ果てて、救われたくてやつてきた旅なのに、どうして自分はこうなんだ。 その時だ、何処からか美しい歌声が聞こえてたんだ	苦笑。
夏樹 3 1	歌が？	びっくり。
榎本 1 1	なんとも美しい歌声だったさ。私は悩んでいた事すべてが消えていくような 心地になった。たぶん、夢の中にいたのだろう。意識が戻ると、目の前には 君がいた	物語序盤の迫田に出会った夏樹と同じ状況。 ふらふらと崖の上に導かれてきた。
夏樹 3 2	それは……どうも……。	
榎本 1 2	兄ちゃん、君は学生みたいだね。そうだろう。夢はあるかい？	
夏樹 3 3	はい。言いませんけど。	無然として。
榎本 1 3	ぷつ、くははは。正直なくせして素直じゃない。ああ、若さつていいよなあ。 無敵だよ。君みたいな若者が、街では夢を求めて奮闘している。 君は負けるんじゃないぞ。	どうも自分事で人に物を話せないタイプの 人間。他人事のように自然となる。
夏樹 3 4	……ありがとうございます。	
榎本 1 4	それでいい。これ以上、死に損ないが喋りたくるのはみつともない。	

	<p>私はこれで失礼するよ。また縁があつたら、いつか。……昼間は悪かつたね。</p> <p>(立ち去る足音)</p>	<p>最後は本心。</p>
夏樹 3 5	<p>……あの人、さつき、何て言った？歌が聴こえてきた？</p> <p>それで、あの崖から……いや、まさかそんな。</p>	<p>「嘘だろ…？まさか、海音の歌が…死の歌」</p> <p>ショックを受ける。人を死なせる歌を彼女が！</p>
海音 2 1	<p>夏樹さん……。</p>	<p>「大丈夫でしたか？」心配そうに。</p>
夏樹 3 6	<p>海音。いつのまに。</p>	<p>どきっ！不意を突かれた</p>
海音 2 2	<p>夏樹さんのことが心配になつて。大丈夫でしたか？</p>	<p>「心配してたんだよ…？」</p>
夏樹 3 7	<p>ああ……うん、問題なかつたよ、平気平気。</p>	<p>ごまかすように。</p>
海音 2 3	<p>……あの、夏樹さん。</p>	<p>様子がおかしい。何か話さなきゃ。</p>
夏樹 3 8	<p>あーあ、なんだか今日は働きすぎちやつたかな！</p> <p>少し疲れが溜まつちやつたかも！ごめん海音、今日はもう帰るよ。</p>	<p>それを避るように。ちよつと動揺を隠せない。</p> <p>明るくごまかす。</p>
海音 2 4	<p>あつ……。</p>	<p>「行つちやうの…？」</p>
夏樹 3 9	<p>また明日ね！</p> <p>(駆けだす足音)</p>	<p>明るさでごまかすように。</p>
夏樹・モノ 4 0	<p>逃げ出すように俺はその場を立ち去つた。しつめた風が鼻先に張り付く。</p> <p>いつもより速い速度で俺は走つた。そのせいだと思いたい。</p> <p>胸の内をたたく音が、気味が悪いほど大きく聞こえた。</p>	

<p>【9：晩夏】</p>	<p>(ヒゲラシの鳴き声)</p>	<p>座敷の場面とは別の日。閑話休題。</p>
<p>夏樹 1</p>	<p>うーん……。</p> <p>(歌詞と譜面を鉛筆でカリカリと書いている音)</p>	<p>作詞開始から二日目。何もまともに浮かんでこない。難産である。</p>
<p>夏樹 2</p>	<p>うーん……うーん……。</p> <p>(紙を丸めて投げ捨てる)</p>	<p>悶々と。</p>
<p>夏樹 3</p>	<p>うーん……うーん……うーん……！！</p> <p>(紙をわしやわしや)</p>	<p>悶々と。</p>
<p>夏樹 4 勝治 1 夏樹 5</p>	<p>むああーっ！ こんな初めてだっ！ 空前絶後の大不調だあ！</p> <p>(遠くからオフの声) うるせえぞ夏樹！ 近所迷惑だ！</p> <p>(ぶつくさと) ちえ、おやじさんだっって結局大声で歌ってるくせに……。</p> <p>はああ……俺ってこんなに下手だっただっけ、歌を作るの……。</p> <p>ええと……海がある綺麗だうとてもう美しいうすごい青いう！</p> <p>いや、そのまんまじゃないか！ こんな海音に贈れないよ……。</p>	<p>「なんて目だ!!」</p> <p>おやじさんは店番で帳簿計算中でした。</p> <p>そんなの本人の前じゃいえないけど。</p> <p>大きな落胆。頭のなかは海音でいっぱい。</p> <p>やけっぱちになって歌ってみる。なぜか音痴。</p> <p>「だーめだこりや!」</p>

夏樹 6	<p>(ヒゲラシの鳴き声)</p> <p>……海音。</p>	ぼつりと、惚れた子の名前をこぼしてみる。
夏樹 7	<p>(夏の終わりが近づく気配)</p> <p>海音……海音……うおおおおおおお！ 頑張れ俺！ 頑張れ俺！</p>	ロマチックに名前をこぼしているが、段々と激情を抑えきれなくなる。初恋の破壊力よ。
勝治 2	俺ならできるっ、俺なら大丈夫だっ、うおおおおおおお——！！	ブチギレ。遊びに来た野良猫が逃げてしまった。
夏樹 8	<p>(遠くからオフの声) だからうるせえぞっ！</p> <p>(聞こえていない) うおおおおおおおおおっ！</p>	青春の雄たけび。
【10：海の崖の幽霊】	<p>(夏の終わりの気配)</p> <p>(夕方。夕焼けに染まる海辺を走る。波。風。ウミネコの声。</p> <p>走る足音。走る息遣い。やがて到着)</p>	
夏樹 1	<p>ふう着いた。今日は早めについちやったな。誰もいないや。おーい海音おー？</p> <p>(ウミネコの声と潮騒。遠くに草陰から虫の声)</p>	走ってきた。あたりを見渡しながら。
夏樹 2	まだ来てないか。やっぱり早すぎたみたいだ。……海かあ。贅沢な時間だよ。	ゆっくり歩きながら、近くの小岩に腰を下ろ

海音 1	ひと気の無い静かな海で、夕焼け色の水平線がまぶしくて、	すイメージ。海を望みこぼすように「海かあ」。
夏樹 3	まっすぐ見つめられないや、きらめきの乱反射。……いや今のフレーズだと	「ひと気の…」からは作詞のイメージをする
海音 2	ゴロが良くないな。これを音楽に乗せるんだったら……。	感じで。「いや今の」からは多つ多つと。
夏樹 4	星が？	「山と言えは？」「川」みたいな合言葉、
海音 3	……煌めく。	当量即妙な答えを出す感じで。
夏樹 5	夜空に？	同じく。
海音 4	……はばたく。	同じく。
夏樹 6	ばつちりじゃないですか、夏樹さん。	「やるじゃん！」
海音 5	海音……この挨拶ってまだ続けるつもり？	「なんか変な感じい」
夏樹 7	夏樹さんが歌詞を考えつくように練習です。私が言つて夏樹さんがつなげる。	「夏樹さんのために考えたんだよ？」
海音 6	おかげでだんだん変わってきたでしょう？	
夏樹 8	うーん、まあね。歌詞って感じたものを書くわけだし、直感を大事にする	天才の感覚を学びたい気持ちがある。
海音 7	ものだとは思うけど……。	
夏樹 9	良くないですか？	小首をかしげる感じで。軽く聞く。
海音 8	そんなことはないよつ。なんというか、その……似てきたような気がして。	割と強く否定。そして少し気恥しそうに。
夏樹 10	……君の歌に。	
海音 9	私の歌にですか？	
夏樹 11	なんだか、ふわあつとした言い方なんだけど、言葉じゃ表すのがとても大変	ホントに言語化しにくい物を言おうとしている。
海音 10	な気持ちをなんとかして表そうとしている……そんな時に出てくる言葉が、	る。ちよつと「自分の世界」に入ってる。
夏樹 12	もう声というより音……音というより音楽、歌になっているんだ。	
海音 11	素敵だと思いますよ。	「よくわかんないけど、すっごいね！」

夏樹 9	しかも、その歌は声として口に出そうとすると弾けて消えてしまう。	「自分の世界」に入ってる。そして自分と海
海音 8	まるで波打ち際の泡のように形が残らない……。何度も何度も試してるのに、	音の才能の差を勝手に感じて、勝手にへこむ。
夏樹 10	胸の奥から出てくれないんだ。そこが僕と君の大きな違いなんだと思う……。	アーティストの面倒な部分です。
海音 9	……大丈夫ですよ。夏樹さん。	やさしく。
夏樹 11	海音？	「励ましてくれるのかい？」
海音 9	逆に私も感じています。私、だんだん夏樹さんの歌が沁み込んできている	やさしく。海音も「自分の世界」をもってる。
夏樹 11	なって。ぼんやりとした空気のような私の心に、ひとすじの道が走り始めた	段々軽率に「好き」を言えない親密度になっ
海音 10	そんな風を感じています。夏樹さんがくれた、前を向こうとする歌の力。	ている。言おうとして言えない。間をためて
夏樹 12	私は夏樹さんにもらったこの心、とても……良い、と思います。	「良い」でごまかす。ずっこけさせるように。
海音 10	良い……かあ。	ちよつとガクツと。
夏樹 12	だめでしたか。	「ごめんね」
海音 11	全然！嬉しいよ、海音にそう言ってもらえたら。僕は海音の歌を……	首をぶんぶん振る感じ。そして自分も言おう
夏樹 13	尊敬、してるから。	とする。けど、言えなかった。
海音 11	尊敬ですかあ。	「ちえー」
夏樹 13	まずかつたかな。	「ごめんね」
海音 12	いいえ、そんな事は……！（クスツ）。	首をぶんぶん。そして吹き出す。二人そろっ
夏樹 14	ぷつぷはは。あー、楽しい！ 君と話しているときが一番たのしいや。	と、箸が転がっても笑うくらいに浮かれてる。
海音 13	夏樹さんって本当によく笑いますよね。すごいです。	
夏樹 15	楽しかったら笑顔になれるよ。自然なことだ。	
海音 14	自然に笑えるのですか？	
夏樹 16	君は、違いの？	

海音 1 5	私……たまたまに自分が分らなくなるので。歌っている時だけが本当の自分で、そうじゃない時の私は一体誰なんだろうって。ときどき思っちゃうんです。	
夏樹 1 7	ありのままでもいいって言うのも、無責任だもんな。たぶん人は誰でもこんな自分じゃないって思うときがあると思うよ。そんな中でも、今こそが自分だって思える瞬間に気づけてるかどうかが、大事なんじゃないかな。	やさしく、未来を示してあげるように。
海音 1 6	夏樹さん……。	「良いこと言うじゃん……！」
夏樹 1 8	……っていうのを、どこかの歌手が歌ってた。	「なんちゃって」
海音 1 7	夏樹さん！	「自分のちやうんかい！」
夏樹 1 9	(笑って。) 僕も正直、そんな簡単に答えなんか出せないよ。自分に自信なんてない。夢はいくらでも語れるけど、夢は美体なんて持たないし、遠くにかすむ蜃気楼。このまま誰からも必要とされないで世界の隅で消えてくのかも、なんて孤独や不安といつも戦ってる。	からからと笑う。
海音 1 8	それでもやっぱり、夢を叶えたいと思いつけてるのですか？	「悩みを話してくれてありがとう。君が凄いと云ってくれる僕だって悩みはあるし、君と同じ人間だよ。だから君も僕も孤独じゃない」
夏樹 2 0	好きだからね。歌が好きだから、歌のために僕は生きて、そして死にたい。	「すごいや、夏樹さん…かつこいいよ」
海音 1 9	それはいけません！	夢のために死にたい。まっすぐな本心。
夏樹 2 1	まさか。たとえ話だよ。	飛び跳ねるように否定。
海音 2 0	嘘でもそんな事、言っちゃいけません。夏樹さんはたくさんの人を歌で元気づけるのでしょ。大事にしてください、夏樹さん、自分の夢を。	予想外の反応に驚きながらも笑いながら。
夏樹 2 2	海音……。	真摯に言う。「あなたには、未来があるでしょ？」
海音 2 1	(ハツとしたように) ごめんさない。私、ちよつとおかしかったですよね。	驚いている。

夏樹 2 3	ううん。ありがとぅ、海音。心配してくれたんだね。	
海音 2 2	私、夏樹さんには色んなことを教えてもらっていますから。 元気でいてほしいんです。	
夏樹 2 4	僕はいたって健康だよ。このところは店にお客さんも少ないし、元気ぞ。	
海音 2 3	いいえ、そうではなくて……。	「あなたを好きになってしまいました」
夏樹 2 5	……何を言おうとしているんだい？	
海音 2 4	その……。	「けれど私、あなたと生きていけないんです」
夏樹 2 6	……海音。	気持ちを感ずる。「俺から言うよ」
海音 2 5	……はい？	
夏樹 2 7	海音は、歌が好きだ。君は歌でみんなを喜ばせたい、そう思っている。	やさしく。誠実に。
海音 2 6	はい。	
夏樹 2 8	僕も一緒。思いつきり歌って聞いた人を元気づけたい。 そのために今、街で頑張っているんだ。	
海音 2 7	夏樹さん。	
夏樹 2 9	海音、街に出ないか。ここを出て広い世界に行こう。 君だつたら認めてくれる人が必ずいる。	
海音 2 8	……いいえ、私にはできません。	ダメです。私はこの世にはいけない存在。
夏樹 3 0	そんなこと。	
海音 2 9	私は、このままでいいんです。	悲しい笑み浮かべながら。
夏樹 3 1	海音……。	
海音 3 0	ありがとぅございます。夏樹さんにそう言ってもらえるだけで、	

夏樹 3 2	私は嬉しいんです。	
海音 3 1	……僕と、一緒に行こう！	思い切って。
夏樹 3 3	えっ。	予想外の言葉。
海音 3 2	僕と一緒に、街に帰ろう。一緒に歌ってたくさんの人をシアワセにしよう。	
夏樹 3 4	夏樹……さん。	嬉しい。好き。
海音 3 3	海音っ。	思い切って、その手を取る。
夏樹 3 5	ハッ……。	しまった！
	僕は、君と歌いたいんだ。	まっすぐ、海音の目を見つめながら。
	(風鈴の音。時間が止まったかのような雰囲気)	
夏樹・モノ 3 6	そのとき、胸いっぱい息を吸って、俺は彼女の手を取った。 初めて俺は、彼女にふれた。 いつの間にか虫の声はやんでいて、潮風も消えてしまっていた。 顔がとにかく熱かった。言うこと言ってその場を逃げ出してしまったかった。 だけど俺は海音の手をしっかりと握って、大きな瞳をまっすぐ見つめた。	
夏樹 3 7	(震えるように) ……どういふ事だ？	「嘘…だろ？」
夏樹・モノ 3 8	ひどく悲しげな表情のまま、彼女は俺を眺めていた。	

夏樹 3 9	(震えるように) ……人間の手が……どうしてこんなに冷たいんだよ……。	氷のような冷たさ。
海音 3 4	(手を振り払われた) 海音っ。	まるで…血の気がないようだった。
夏樹 4 0	ごめんなさい。	逃げるように走り去ろうとする。
夏樹 4 0	(手を振り払われて驚く。) 海音、待つんだ！ 待つてくれ！	慌てて追いかけて、呼び止める。
夏樹・モノ 4 1	<p>どうした。何があつた。いつたいこれはどういう事だ。</p> <p>心臓の鼓動がうるさい。頭の思考の邪魔をする。</p> <p>都合のいい理由探しをできる余裕がまったくない。だから俺は正直なんだ。</p> <p>思い出したくもない言葉がわつと脳裏を這い上がり、</p> <p>点と点が線を結んで、一つの結果を導き出す。</p> <p>俺は嘘がつけぬ奴だ。声が震えているのに、こんな事をたずねてしまう。</p>	
夏樹 4 2	海音、君こそが……海辺の崖の幽霊なのかい。	
夏樹・モノ 4 3	<p>彼女は、何も答えなかつた。</p> <p>だからこそ、その沈黙が語る事実は、胸の中でこたました。</p> <p>海音が、この世の者ではないことを。</p> <p>海音が、生きている人間じゃないことを。</p> <p>海音が、海音が海音が……海音が！</p> <p>海音が、俺にとって大切な存在であつたことを。</p> <p>痛みが俺に、恐ろしきものを突きつける。</p>	

夏樹 4 4	嘘だ、信じないぞ。なあ海音、こっちを向いてくれよ？話を聞かせてくれよ。	現実を前に替えている
海音 3 5	嘘だと言ってくれよ、なあ海音……海音っ！	今までと様子が違う。
夏樹 4 5	海音っ！ 待ってくれ、行かないでくれ！ 海音！ ……うわっ！	追いかけるが、突風が吹きつけてきた！
	(突風が海辺の崖を叩きつける。夏樹は行く手を阻まれる)	
夏樹 4 6	海音！ (絶叫) うわああああー！！！！！！	満身から悲痛な感情をまき散らす。
夏樹・モノ 4 7	何度その名を叫んだらうか。吹き荒れる風の中で必死になって彼女を呼んだ。だけど、彼女は二度とこちらを見ることなく、宵闇の中へ姿を消した。風がようやく収まるころ、あたりはとても静かになった。	
【11：歌声と少年】	(夕暮れの浜。ヒゲラシの声。潮騒の音。誰もいない)	
夏樹 1	俺は……何をやってんだらうな……。これで何度目の単独ライブだ。聴く人もいない。聴かせたい人もいない。俺はいつもこうだよな。変わってないや。 (潮騒が響いている)	あれから数日が経ち、毎日浜辺に訪れている。けど海音はもういない。俺が彼女を傷つけたんだ。

夏樹 2

……やっぱり今日も歌う気になれない。俺は何のために歌っていたんだ？
誰かを元気づけるため？ お笑いじゃないか。俺自身がこんなものなんだ。
追いかけていた子が幽霊でした、さようなら。(自嘲の笑い。)なんてことだ。

(潮騒が響いている)

夏樹 3

海音、どこに行つたんだ。

俺があんな事さえしなければ、君は今も隣で笑つてくれたか？

虚しいよ。苦しいよ。君が見せたあの時の顔が今でも瞼の裏で僕を責めるよ。
ごめんよ、海音。本当にごめん。

(潮騒が響いている)

夏樹 4

太陽が沈んでいくまでこんなに長くかかるだなんて、俺、知らなかったよ。

星空の色が冷たいな。どこまでも凍り付いてるみたいだ。

記憶も冷凍保存できたらしいのに。

風はみなもを揺らすだけ。あるのは虚しい響きだけ。

(潮騒が響いている。一番星が見えだした夕暮れ。ヒグラシの声)

次の夜。だんだん自暴自棄になつてきた。

また別の夜。失恋の絶望感？

いや、俺は、君を本当に求めていたんだ。

だけど俺が壊してしまった。みんな。みんな。

また別の夜。

この痛みにも慣れてきた。

周りの景色に目をやる余裕が生まれてきた。

夏樹 5	<p>何を求めて毎晩ここに来るんだらう。だんだん分からなくなってきた。 ……星だ。星が出ている。月も見える。半分の月が昇る空。ああ、綺麗だ。 あの日もたしか、こんな風に日が暮れていく夜だった。 歌ったなあ、いろんな歌を……。ああ……。……楽しかったなあ。</p> <p>(潮騒が響いている)</p>	<p>3日後、俺は街に帰るんだ。 まったく、今年の夏は不思議だったな。 言い終えた後、膝から崩れ落ちる。</p>
夏樹 6	<p>(嗚咽を漏らす) 会いたい……会いたいよ……会いたい、会いたい……。 (激しい嗚咽) (やがて落ち着きを取り戻していく) ……何やってんだよ、俺。 かつこわるいよ、だつさいよ。(ヤケになって) ……んああああああー！！ わかった！もういいよ、やめにしよう！はい、じめじめ気分おしまい！ 頑張れ俺、頑張れ俺、頑張れ俺えっ！もう決めた！これだけは邪魔させない！ もう終わりにしてしまおう！ この海での思い出なんか、全部なかったことにしてしまおう！</p>	<p>無理やり、自分を励ましてやる。 このまま街に帰ってたまるか！ そしてまた夢に向かって頑張ろう！</p>
夏樹 7	<p>江藤夏樹、歌います！</p> <p>(≡「あの星空の真ん中に」BGM)</p>	<p>必死になって歌う自分の姿を、</p>
夏樹・モノ 8	<p>こんなにも、心の筋が伸び切るほどに気持ちを乗せた歌なんて、 俺はした事あつただらうか。</p>	<p>どこか上の方で俯瞰して眺めるように。</p>

夏樹 9	<p>俺は歌った。口から感情が飛び出すような歌い方。</p> <p>すべては別れを告げるため。自分にけじめをつけるため。</p> <p>さようなら。さようなら。さようなら……。</p> <p>(息切れ) もう、何も残っちゃいない……。空っぽだ……。</p> <p>(拍手の音)</p>	
榎本 1	(感動と興奮) 素晴らしい歌声だ。まさか兄ちゃん、君が歌っていたとはね。	
夏樹 1 0	……あなたは……こないだの酔っ払いか。生きててくれて良かったです。	あの酔っ払いか……。一人になりたいのに。
榎本 2	これはどうも。今日はどこに行っても酒が売ってなくなつてね。	
夏樹 1 1	何の用ですか、どうしてここに。	
榎本 3	お礼を言いたい。	このセリフだけはまつすくな気持ち。
夏樹 1 2	お礼を? なんのですか。	
榎本 4	今の歌は街じゃ聴かない歌だね。君が作ったものなのか。	
夏樹 1 3	ええ、まあ。それが何か。	
榎本 5	君の歌を聴かせてもらった。	
	君の歌う素直なメロディと歌詞、実に素晴らしいかった。	
	聴いていると、心が洗われるようだと感じた。	
夏樹 1 4	つまり、考えを改めたとでも言いたいんですか?	
榎本 6	ああ。久しぶりだ、歌にここまで感動するとは。	

夏樹 1 5	君の歌に生きる力をもらった……。ありがとぅ、本当にありがとぅ。 兄ちゃん、いいもの持っているね。 ……なんだよ。なんだだよ、あんたは、いつたい。 いきなり俺の前に現れて、なんでそんな事を言うんだよ。 そんなこと言われたって、俺は、どうしたらいいんだよ……。	心を込めて、言う。 なんだよさつきから。いちいちうるさいな！ あんたに歌の何が分かるんだっていうんだ！
榎本 7	俺は……自分の歌が、きら―― (夏樹の言葉をさえぎって)綺麗な歌声、とは今のじゃ到底言えないけどね。	嫌いになってしましそうだ。
夏樹 1 6	俺には、できないことが多すぎる。	吐き捨てる。自分が嫌になっている。
榎本 8	それで泣いていたのかい。	
夏樹 1 7	……見られてたんですね。	
榎本 9	君はたしか、夏樹君と呼ばれてたね。僕はこういう者なんだ。	
夏樹 1 8	名刺？ おじさん、そんな物持ってたんだ。	
榎本 1 0	ま、こんな風体じゃ仕方ないさ。とにかく受け取ってくれ。	
夏樹 1 9	……榎本修一。トデイ・ミュージック・エンターテインメント……？	読み方は、えのもしゅういち。
榎本 1 1	知ってるような反応だね。いかにも私は国内最大手レコード会社の重役の 肩書を持ちながら、自らダイヤモンドの原石を探しに行くことで有名な スーパースカウトマン、榎本修一さんよ！	自分の素性を明かして誇らしげに。
夏樹 2 0	そつくりさんって本当にいるんですね。	バツサリと。
榎本 1 2	本物じゃい！けどま、ただの音楽好きな放浪癖の酔っ払いに変わりはないか。	……まあ、素行が悪いししゃーないか。
夏樹 2 1	それにしても、まさか。信じられない。	「いや、いやいやいや。マジで本物なん？」
榎本 1 3	日頃の行いがよくないからねえ。信じられなくて当然だろう。しかしそれで	『しかしそれでも良い』以降は肩書にみあう

夏樹 2 2	も良い。ここにいる一人の人間が、君の歌に救われた事実だけは信じてくれ。	かつこいい大人の男として若者に告げる。
榎本 1 4	君の歌は、素晴らしかった。	
夏樹 2 3	は……なん、で。	「信じられないよ、そんな凄いい人だったのか」
榎本 1 5	そこでだ。単刀直入に言わせてもらおう。ウチで歌ってもらえないだろうか。	誠実に告げる。
夏樹 2 4	ちよつと、いきなり何言ってるんですか。そんなんじやまるで……。	
榎本 1 6	スカウトだよ。わざわざ聞かなくてもわかるだろう。	
夏樹 2 5	こんなに、あつさり？	
榎本 1 7	返事は今でなくて構わない。相談なら名刺の連絡先まで。いつでもカモン。	
夏樹 2 6	ちよつと待つてくださいよ。どうして俺なんかを。	「俺なんかを」
榎本 1 8	君だからこそさ。私は君の音楽が好きなんだよ。	「君だからこそ」
夏樹 2 7	俺の、音楽を……？	前にも誰かに言われた気がする。
榎本 1 9	人はみな、素晴らしい力を持っている。未来を豊かにするのは、それに	
夏樹 2 8	気づけるかどうか。だから若者よ……自分をあなどるな。夢を語れ。	励ますように。榎本も努力と苦勞の末に今の
榎本 2 0	追いかけて続けろ。君達には、無限の可能性がある。	立場を手に入れた人物であった。
夏樹 2 9	おじ、さん……。	
榎本 2 1	そんな事を、君の曲が言っていた。(息をつく) ……この海は、良い所だよ。	
夏樹 2 8	さして、帰るとするか。街の方が性に合うね、私のような傾奇者は。	傾奇者。読み：かぶきもの。
榎本 2 0	あの、おじさん！	呼び止める。
夏樹 2 9	はん？	「どうした？」
榎本 2 1	ありがとう、ございます。	頭を下げる。
夏樹 2 2	……いずれまた、上で会おうな。	後ろ向きに手をひらひら振って去るように。

夏樹 2 2	<p>(潮騒が響いている。榎本が去る)</p> <p>俺の夢……叶うんだ……俺の夢が、叶うんだ！ (走り出す)</p>	<p>独り言。だんだん熱をもって具体化してくる。</p>
夏樹 2 3	<p>(風を切つて息を荒げて走り抜ける。</p> <p>浜辺から、海辺の崖の上まで、一気に駆け上がる)</p> <p>(雄たけび) うおー！！！！ (しばらくして、その場にへたり込む)</p> <p>(気が抜けた炭酸のように) そつか、俺、夢、叶っちゃうのかあ。そつかあ。</p>	
海音 1	<p>よかったですね。</p>	<p>すう、と闇の中から現れたように。</p>
夏樹 2 4	<p>(ハツとして探して気づく)海音……！やつと会えた！海音、あの時は……！</p>	<p>走り寄りとうとする。</p>
海音 2	<p>来てはいけません。</p>	<p>言い放つ。</p>
夏樹 2 5	<p>……海音？</p>	<p>様子がおかしいことに気づく。</p>
海音 3	<p>こちらに来てはいけません。夏樹さん。</p>	<p>正体を現す。</p>
夏樹 2 6	<p>(ありえない光景を目の当たりにして動揺)海音、その足は……！</p>	
海音 4	<p>そうです、あなたが見ているのは、崖の向こうで虚空に浮かんでいる少女。</p> <p>これが、本当の私です。……ねえ夏樹さん、あなたの足元に青い玉の首飾りが落ちているでしょう？それを持っていつてください。</p>	<p>「ねえ夏樹さん」は妖しく。従来の人物像をガラツと変えるくらい、不気味な笑みで。</p>
夏樹 2 7	<p>持っていくつて、どこにだい。</p>	

海音 5	『ふなばた』。浜の近くにある船宿です。 ……わかった。君の言うとおりにしよう。 そこですべてが分ります。 (一陣の風が吹く。)	
夏樹 2 8		
海音 6		
夏樹 2 9	海音！ ……消えてしまった。この首飾りにいったい何があるんだ。 ……『ふなばた』か。聞いたことのない名前だ。探しに行こう。	
【1 2 : 村の記憶 の片隅に】	(夜明けの気配。薄明の空が徐々に朝の色をつけていく。 ヒグラシが鳴いている)	
夏樹・モノ 1	ゆうべ、一晩中、いろんな事を考えていた。眠れなかった。 この海に来てから俺の周りでいろんな事があつた。 なんて言えるのも、今日という日が来てしまったからかもしれないな。	
勝治 1	(大あくび) ふああ……もう起きてたのか、おはようさん。	
夏樹 2	おはようございます。おやじさん。	
勝治 2	さあて今日が最終日、働き収めた。最後までよろしく頼むぞ、夏樹。	
夏樹 3	はい、頑張ります。	

夏樹・モノ 4	こうして始まる最後の一日。お客さんは両手で数える程度だった。 (潮騒。ヒゲラシの声)	
勝治 3	(小さく伸びをして) んん、ああ。よし、店を閉めるとしようか。 お疲れさん、夏樹。	
夏樹 5	はい、掃除もやっておきました。	
勝治 4	そうか、ありがとな。夏樹もだいぶ気が利くようになったよな。	
夏樹 6	そりゃあ、毎日おやじさんに怒鳴られまくってきましたから、さすがに。	
勝治 5	(苦笑して) この野郎、言うようになりやがって。	
夏樹 7	……あの、おやじさん。ちよつと聞いてもいいですか？	
勝治 6	なんだ、どうした。	
夏樹 8	『ふなばた』って船宿を知りませんか？この海の近くにあるらしいんですが。	
勝治 7	『ふなばた』？ 夏樹、お前……なんて事言いやがんだ！	
夏樹 9	えっ。	
勝治 8	『ふなばた』って言つちやお前、ここだぞ？	
夏樹 1 0	(非常にコミカルな驚き方)	
勝治 9	お、おい！？ 大丈夫か、夏樹！？	
夏樹 1 1	ここが……ふなばた？	
勝治 1 0	お前、職場の名前も知らずによく働けたな！	
夏樹 1 2	すみません、ずっと海の家で呼んでいたんで……。じゃ、じゃあおやじさん。	1か月間を思い返しなが あはは。 空気を委えるもの期待しています。

勝治 1 1	この首飾りについて何か知ってたりしませんか……？	
夏樹 1 3	なんでお前がそれ持ってんだ！	
勝治 1 2	ええっ!？	
夏樹 1 4	そいつは俺が孫の誕生日にやったプレゼントじゃねえか！ (非常にコミカルな驚き方。パート2)	見せどころです。
勝治 1 3	お、おい!？ 夏樹、しつかりしろ!？	
夏樹 1 5	このペンダント、お孫さんへの贈り物だったんですか。	
勝治 1 4	ああそうだよ。どうしてお前が持っているのかは知らねえがな。	
夏樹 1 6	……まあ、色々あつて……。	
勝治 1 5	何か、言いたいことがあるみたいだな。	察した。海辺の崖に行ったんだな。
夏樹 1 7	……はい。あの、おやじさん。教えてください。過去にこの村で、何があつたのですか。	
勝治 1 6	藪から棒だな。それを知つてどうする。	「お前、いつたい何を考えている。」
夏樹 1 8	僕は……知らなければいけないんです、この海に起きた事。そしてペンダントの持ち主であるあなたのお孫さん……海音さんの事を。	ドキリ。しかし落ち着いている。
勝治 1 7	海音……どうしてお前がその名前を知っているんだ。	言おうとする。
夏樹 1 9	それは……。	確かめるつもりで。自分は会えなかった。
勝治 1 8	会つたのか。あの子と。	
夏樹 2 0	おやじさん、ごめんなさい。実は僕、毎晩あそこに行つていました。 浜の向こうにある、海辺の崖の上に。僕は、そこで……。	「貴方の孫の幽霊と会いました」言えない。
勝治 1 9	……やっぱりか。夏樹、テーブル席から椅子を持ってきて、そこに座れ。	孫が選んだのは、お前だったか。わかった。

夏樹 2 1	おやじさん。	
勝治 2 0	知りたいんだらう、海辺の崖の真実を。話してやるよ、手短かだけどな。	
夏樹 2 2	……はい、お願いします。	気を引き締めて。
勝治 2 1	……海音は、幼い頃から歌の才能に恵まれた子だった。隙あらば歌つてるような、自由奔放な性格で、いつも村の連中を笑顔にさせていた。もしも海音が歌わなかったら、明日の海は大シケだと言われたくらいに。海音は村のみんなに愛されていた。	ゆつくり間を取って、語り始める。 遠き日のいとおしい日々を思い起こすように。
夏樹 2 3	愛されていた……。	「やっぱり、彼女はもう生きていないのか」
勝治 2 2	亡くなっているよ、ずっと前にな。どうして、あんなつまつたんだらうな。	『どうして〜』嘆息を付くように。
夏樹 2 4	おやじさん。	心配。辛い記憶を喋らせている。
勝治 2 3	いけねえ、年寄りの昔話だ。感傷的にならないよう話すとしよう。	「いいんだ。これが俺の役目なんだ。」
夏樹 2 5	どうか、無理しないでくださいね。	いたわるように。辛い記憶を喋らせている。
勝治 2 4	年寄り扱いするんじゃないやねえよ。……確かに海音は、歌が上手かった。おそろしいほどに人の心を動かす力を持っていた。それをどこから見つけてきたんだらうな、あの連中がやってきたんだ。	(自虐ネタを他人に言われると反発する奴) 落ち着いて話を続ける。
夏樹 2 6	あの連中？	
勝治 2 5	街の人間だ。ある日突然やつて来て、海音の歌を売りに出そうと言つてきた。背後には、良くない人間の影も見えた。この村全てを買い上げて、大きな観光施設を建てるつもりとも言っていた。	落ち着いて話を続ける。
勝治 2 6	村の皆は反対した。昔からこの海で暮らす俺達にとって、生まれ育った土地を手放すことなど堪えられる話じゃなかった。だが街の人間はしつこく押し	落ち着いて話を続ける。

夏樹 27	かけてきた。村中みんなで抗っていた。そして最後に、意地の悪い人間がこんな話をしてきた。土地を渡すか、海音を売れと。	
勝治 27	まさか、そんな一方的に決めつけられる話じゃないでしょう。	大きく反応。そんな理不尽を許せない。
夏樹 28	そういう事をできる人間がいたんだよ。……それで、決めてしまったんだ、あの子自身が。海音は、街に行くことを奴らに自分から名乗り出たんだ。	落ち着いて話す。なだめるように。
勝治 28	そんな……。	信じられない。愕然。
夏樹 29	街に行くことが決まった海音……それからだったな。毎晩、あの崖に出かけては海に向かって歌ったり、変な言葉遣いでしゃべりだしたのは。	落ち着いて話を続ける。
勝治 29	前は、そうじゃなかったのか。	ぼつりと。
夏樹・モノ30	誰にも物怖じしないで引つ張りまわすような子さ。人懐っこすぎていつも冷や冷やさせられていた。……しかし、そんな海音も……。	在りし日の最愛の孫の姿を思い浮かべる。
夏樹・モノ31	親父さんはそれからしばらく口を開かなかつた。ようやく話してくれた言葉の続きも、ひどく途切れ途切れでとても辛そうに見えてしまった。	最後は心に限界が来る。
夏樹・モノ32	海音は、村の皆を困らせまいとみずから海を離れる事を決意した。しかし心に傷を負う形での決心だったのだらう。それまでやって来なかつた事をしはじめた。海辺の崖で歌う事と、自分を偽る言葉で話し出した事。	
夏樹・モノ32	そんな日を過ごすうちに、やがて運命の日が来た。夏の終わりかけた頃。嵐の多い時季だったらしい。海音は誰にも告げることなく家を抜け出し、	

夏樹・モノ33	一人で海に向かってしまった。夕焼け空は雲に覆われ、潮風はぎつと強かつたろうに。いつもと違う海だとしても、彼女はそれさえ抗おうとした。	
夏樹・モノ34	……何てことをしてくれたんだ、海音。	この一言で海音の「死」を表したい。
夏樹・モノ35	それはとても穏やかな顔だった……親父さんは昔話をそう結んだ。	
夏樹35	そんな悲しい話が……あつたのですか、この村に。	鉛を背負ったような気持ち。
勝治30	その様子だと、街には広まってない話みたいだな。最後まで聞いてくれて、ありがとうな。……ああそうだ、これは、お前が持つててくれないか。	安心。※地上げ屋は、この土地に負のイメージが付いたとして事業から撤退しました。
夏樹36	え……これつて、海音さんの首飾りじゃないですか。大事な思い出の品でしょう。	大事な遺品。もらえない。
勝治31	いや……その首飾りはお前に持つていてもらいたい。そして、頼む。夏樹の手で返してやつてくれ。	すべてを分かっている。海音と夏樹の間にはただならない関係が結ばれていると。
夏樹37	そんな。だったら親父さん、海辺の崖の幽霊つて……。	幽霊つて海音と分かつて、ずっと今まで……。
勝治32	何も言うな。頼む夏樹。俺達がどうやつても会えなかつたあの子に、海音に、お前は選ばれたんだ……。還してやつてくれ、頼む夏樹、この通りだ……。	「海音を空に還せるのはお前だけだ。あの子を自由にしてやつてくれ」平伏する。
夏樹38	親父さん……。	(人を死に誘う悪霊と呼ばれ始めている)
勝治33	どうか会つてやつてくれ、あの子の話を聞いてやつてくれ。そしてどうか、伝えてやつてくれ。お前のことを誰も忘れてなんかないと。	もう堪えられない。最愛の孫を救つてくれ。
夏樹39	……わかりました。俺、やります。やつてきます。	使命感を帯びる。俺も、海音を愛している。

勝治 3 4	夏樹……ありがと。そうと決まれば日暮れまでもう時間がない。夏樹、	
夏樹 4 0	急いで行ってくれ。お前との思い出がある場所にきつとあの子はいるはずだ。	
勝治 3 5	はい。	
夏樹 4 1	頼んだぞ、もう一度、あの子と歌ってこい……!	最愛の孫を託す。背中を蹴飛ばすように。
	……はい!	
	(駆けだす音。)	
夏樹・モノ 4 2	大きく首を縦に振って、俺はふなばたの看板から飛び出した。走りながら	いつの間にか、季節は移ろって行くのだなあ。
	見上げた空はさつきまであんなに明るかったのに、いつの間にか茜色を濃く	時の流れは止まらない。俺も止まるわけには
	していた。夏の終わりが近いらしい。涼しくなった風を切って海への道を	いかない。青春ダッシュ。
	走る俺は、あの日に近い胸の高鳴りを感じていた。	あの日：海音と初めて会った夜の事。
夏樹・モノ 4 3	海音。俺は君と出会えたこの夏を、記憶の一つで終わらせたくない。	まつすくな愛。
	今はそう思っているんだ。果たして君はどう思っているだろう、曲がりつ	
	ばなしの俺なんかを。だけどそれでも俺は君にまた会いたい。言葉にして	
	伝えたい事がまだまだあるんだ。	
夏樹・モノ 4 4	馬鹿だと思えば笑ってくれ。それでも俺は前に向かって進まなくちやいけな	どんな特別な時間もいつかは過去になる。
	いんだ。終わる前に。終わらせてしまう前に。終わりの時が来る前に。	だから今を全力でぶつかっていきたい。
	君といた夏が思い出になる前に。俺は、俺のやりたい事をやり抜いて見せる。	悲嘆にくれたあの日々への反逆。
夏樹・モノ 4 5	どうか馬鹿だと言ってくれ。俺の願いは一つだけ……もう一度君と歌いたい。	「君に好きだと伝えたい」

【13：ウミノウタ】	(潮騒が響いている。夕方の浜辺。)	
夏樹モノ1	静けさが漂っている。いつもの場所に、俺はいた。渚には、穏やかな波が打ち寄せている。ひと気のない、思い出の場所。世界中に俺しかないみたいだと、かすかに思った。波と風が包む世界で、俺は静かに耳をすませた。	
夏樹モノ2	歌声が聴こえる。潮騒が響く海辺で俺は顔を上げた。 ひんやりと湿った風が汗ばむ頬を撫でた。水平線に太陽が沈んでいく。 誰もいない夏の浜辺で、俺は確かに彼女の歌声を聴いた。	
夏樹3	海音、そこにいるのかい。	すぐそばの松の木の影に向かって。
海音1	私はいつでもここにいますよ。前にも言っただじゃないですか。	穏やかに。ぼんやりと薄闇の中から姿を現す。
夏樹4	海音、君の事、勘違いをしていた。君は、僕にとって誰よりも眩しくて、素敵で、揺らがない存在なんだと思ってた。そんな風に見てしまっていた。ごめん、本当にごめん。	幽霊同然な登場を見ても動じない。覚悟はできてる。まずは正直な罪悪感を口にして謝る。
海音2	聞いたのですね、おじいちゃんに。	穏やかに。「そう。すべてを知ったのね」
夏樹5	ああ。	頷く。
海音3	馬鹿みたいな話でしょう？ 私ったら本当に何やってるんだらうって、夏樹さんも思いましたよね。	まだ感情的にならない。抑えて。
夏樹6	海音。	「そんなことないよ」

海音 4	生きていればもつと良い事あつただろうに。私、いつもこの崖から見ていたんです、海にやって来る人達の顔を。みんな、みんな、楽しそうで、幸せそうで、命が輝くように見えていて。生きていれば歌ったり、笑ったり、恋したり……今更になつて分かつてしまつたんです。	
	生きているって自由なんだって。	
夏樹 7	自由……。海音はたくさんの人に期待をされていたんだろう。とても苦しかったんだよね。	勝治の胸中を聞いて
海音 5	あなたは分かりますか。この気持ち。私は後になつて気づいたのですから。	サブテキスト。微笑で悲しみを隠す。
夏樹 8	海音、君は……。	そんな姿がいたたまれない。
海音 6	ほら、夏樹さん、見てくださいよ。星がきれいですね。	夏樹の話を受けない。気持ちを誤魔化す。
夏樹 9	空はまだ明るいよ、星なんてまだ少ない。	優しく、いさめるように。
海音 7	いいえ、星がきれいです。もつとよく見て。	
夏樹 10	海音。	
海音 8	きれいだと言つてください。	夏樹からは海音の表情が見えていない。
夏樹 11	……そうだね、星がきれいだ。	
海音 9	私、夢見てたんです。星みたいにきらきら輝く人生を過ごしたいって。歌と一緒に、自由なところで。	独白。まだ感情を抑える。微笑みで。
夏樹 12	自由なところで。	『自由』海音の話のキーワード。
海音 10	諦めなければよかった！	「あーあーざーんねん！」感情発露。
	(強い印象の音楽)	

海音 1 1	あの日の私が描いた未来は、あんな風になるだなんて思っていなかった。私は精一杯に考えていたつもりだったし、みんなのためになる選択をしたはずでした。なのにどうしてか、ずっと胸が苦しかった。私は何の為に歌うのだろう、みんなの為に言つて選んだ道にはいつも陰が潜んでいました。誰のため的人生を私は歩むのだろうと、怖くて、不安で……。	あの日 Ⅱ 街に行く決めた日
夏樹 1 3	海音。	あんな風 Ⅱ 村に消えない悲しみが残る事と、自分自身にひどい葛藤が生じる事。自分の人生を生きている気が全くしなかった。それを当時の海音は明確に言語化できなかった。
海音 1 2	だけど夏樹さん、あなたは孤独や不安と闘いながら、それでも歌が好きだと言っていました。そして好きな物のために生きていきたいって。どんな時でも諦めない前向きな言葉をいつもかけてくれました。私は、あなたの心の強さに憧れています。あなたが現れてから、私はたくさんの考えが変わりました。私は、あなたになりたかった。	いたたまれない。
海音 1 3	今が辛くたって諦めなければ、いつかきっと本当の意味で自由を手に入れられてたのかも。	「もしも私が夏樹さんだったら、そんな境遇さえも乗り越えなして、先へ、先へ進んでいったんじゃないのかな」海音から見た夏樹は、やっぱりとても強い人。
夏樹 1 4	海音。	伏し目がちに。まつ毛で目元が隠れるような。
海音 1 4	でも、まつ、世の中そんなに甘くはない。なぜか、こんな姿になつてまでこの世に残っているなんて、私、どうなつちやっているんだろう。本当、ばかみたい。	「そんなことはないよ」
夏樹 1 5	そんな事はない！ 君は歌を愛していたんだ。海音は真つすぐだったんだよ。誰よりもずっと強く歌と共にいようとした。その気持ちは紛れもなく本物だ。	やけっぱち。かつての海音が少し出る。
海音 1 5	やさしい言葉をかけてくれるのですね。	「結局、未練があつたんだよね。後になつて気づいたよ」
夏樹 1 6	……同じだからさ。	「自分を傷つけることは言わないで」切実に。一言一句嘯みしめて伝えるように。
		夏樹の方に振り向いて。

海音 1 6	どういう意味ですか。	
夏樹 1 7	僕も、君になりたかった。	
海音 1 7	夏樹さんが、私に？	眉毛が少し上がる。驚きが少し表に出る。
夏樹 1 8	正直言つて海音、君は天才なんだ。歌と共に生きて、自分自身が音楽であるかのように生きている。僕がどんなに努力しようと辿り着けない感性と才能がある。そんな君に、僕はずっと憧れていた。	
海音 1 8	夏樹さん……。	「憧れていた」に対する共感と少しの喜び。
夏樹 1 9	ずっと君に近づきたかった。	恋愛感情とは別の、天才に対する追求心。
海音 1 9	こんなに近くにいたのに。	「そんな風に思っていたのは知らなかった」
夏樹 2 0	お互いの背中を見合つてたようだ。	
海音 2 0	一緒つて、思つても良いんですか？	おそるおそる。海音にとって夏樹がすべて。
夏樹 2 1	一緒だよ。	
海音 2 1	ふふふ……あははっ。いやあ、照れますね。私と夏樹さんが一緒。そんな風に思つてくださつてたなんて。あはは、あははははははっ。	しかし現実はどうだ。私はすでにこの世の者ではない。まるでおかしい。笑える。
夏樹 2 2	海音……？	「海音の様子がおかしい」
海音 2 2	あーあ、私つてば。あーあ。あははっ、ほうら、夏樹さんも笑つてくださいよ。これでも私、小さい頃は嵐を呼ぶ子なんて言われてたんですよ。一緒に笑つてください。	夏樹と一緒になれた喜びと、悲嘆すべき己の状況。相反する現実同士の狭間にいて、もう堪えられなくなってきた。微笑みの仮面が崩れ出す。
夏樹 2 3	海音。	
海音 2 3	はあ、なんて楽しいんでしょう！ 一緒です！ 一緒です！	魔ランション気味。
夏樹 2 4	海音。もうやめようよ。無理をして、ていねいな言葉でしゃべるのも。	「海音」はいさめるように。「頼むから」。

海音 2 4	無理なんてしてません。	微笑みの仮面に更にヒビが入る。
夏樹 2 5	君の言葉はとてもきれいだ。でも今の君の声はとても辛そうに聞こえるんだ。	切実に。「自分を傷つける真似はやめて」
海音 2 5	していないからっ。(間。)無理なのは、今から夢を追うことですよ。夏樹さん。	強い拒絶。本当はつらい。間をおいて、受け
	死んだら、おしまいなんです。	入れるべき事実を口にする。
夏樹 2 6	死んだら、おしまい。	反復。事実にして真実。
海音 2 6	私の体、冷たかったですよね。こんな体じゃ、もう夢は叶えられません。悔	「私の体くく」……諦観。
	しいなあ、とても悔しい。でも、後悔しても遅いんです。もつともつと……	「悔しいなあくく」……子供っぽさ。
	生きればよかった。	「でも、後悔くく」……次第に涙が奪れ出る。
	(夏樹、海音の体を抱きしめる。)	音楽の高鳴りとフェージョンしたい。
夏樹 2 7	……………俺はっ！	「女の涙を放っておけるかあ！」
海音 2 7	(驚きの声。)	「えっ……」
夏樹 2 8	俺はっ、その夢をつ、叶えたいと思いますっ！	胸に海音を抱いて、一生懸命に宣言する。
海音 2 8	えっ……。	素直な驚き。何を言い出すの。
夏樹 2 9	俺にください、海音の夢っ！	熱量。じめじめしてるのは好きじゃねえ！
海音 2 9	なつき、さん……？	『俺』って言うんだ……。圧倒される。
夏樹 3 0	その夢、俺が代わりに叶えますっ。海音の分まで生きて、歌って、みんなを	涙が出てくる。一生懸命。海音の分まで泣く
	笑顔にしてみせますっ。俺が夢……叶えますっ。絶対につ、海音の夢つ、一	つもりで。支離滅裂になりながらも、感情
	生懸命つ、頑張りますからっ。それに海音が冷たいなんてはずがない。	が口から飛び出している。締めの一連は、ま
	君の涙は、こんなに温かいじゃないか。	っすぐ理性と愛情をもって「君の涙はくく」。

海音 3 0	夏樹さん。	胸が温かくなる。その末の呼びかけ。
夏樹 3 1	俺、君の事が好きだ。(ぐちゃぐちゃな顔)	真剣に。この場はダサいほどカッコいい。
海音 3 1	……なんて表情、してるんですか。	夏樹の一生懸命さに、思わず笑みが出る。
夏樹 3 2	俺、嘘が付けられないんだ。	正直なのが取り柄です。鼻水垂れてるけど。
海音 3 2	変な人。でも……ありがとう。	微笑みの仮面が破れ、本当の微笑み。
夏樹 3 3	うん。君と会えて、よかった	腕の中に海音の存在を感じて。温かく感じて。
海音 3 3	私もあなたに出会えてシアワセでした。	やがて抱擁を解いて、二人は手を取り向き合
夏樹 3 4	来年の夏もまた来るよ。また一緒に歌おう。それまで待つて。	います。穏やかに温かくて優しい時間。
海音 3 4	……夏樹さん？	語尾を上げて、愛らしく。心を許した相手に。
夏樹 3 5	どうした？	極めて愛情をこめた声音で。
海音 3 5	初めて会った日のことを覚えていますか？	
夏樹 3 6	うん、もちろん。	
海音 3 6	外から来た人で私を見つけてくれたのは、夏樹さんが初めてでした。とても嬉しかったです。ありがとうございました	
夏樹 3 7	海音が選んでくれたからだ。	
海音 3 7	まだありますよ。毎晩ここに来てくれて、ありがとうございました。あと、私とお話してくれて、ありがとうございました。	
夏樹 3 8	うん。	嬉しい。
海音 3 8	一緒に歌ってくれて、一瞬に笑ってくれて、歌を好きになってくれて、たくさん優しくしてくれて、たくさん……たくさん、ありがとうございました。	
夏樹 3 9	もっ、もういいよ。照れるから、もう……。	照れくさくなつて。

海音 3 9	最後にシアワセをありがとございました。私もう思い残す事はありません。	最高に晴れ晴れとした顔で。
夏樹 4 0	……え？ 海音。いま、何て言った。思い残す、こと？	急速に胸の奥が冷えていく。
海音 4 0	ごめんなさい夏樹さん。今年の夏が、最後です。	
夏樹 4 1	どういう事だ、どうしたんだ海音……うつ。	目の前が急に真っ白になる。
	(劇的な音楽。海音の体が光だし、夕闇が光に照らされる。)	
海音 4 1	お別れです、夏樹さん。	
夏樹 4 2	何だ、これは……。	
海音 4 2	私の思い残す事は無くなりました。だから、行かないと。	
夏樹 4 3	そんな、海音。待ってくれ、行かないでくれ！	
海音 4 3	夏樹さん……。	
夏樹 4 4	どうして、どうして！ 君の思い残した事って何だ、どうして君は満足気なんだ。分からない、分からないよ！	
海音 4 4	……夏樹さん。私はもう大丈夫なんです。	
夏樹 4 5	そんな、だって、君は。	「君はようやく幸せを感じたんだろう」
海音 4 5	私、嬉しいです。私のために夏樹さんが泣いてくれて。それだけ想ってくれる素敵な人に出会えたんだと、改めてシアワセを感じます。ああ、なんて素敵な付録だったんだろうってね。	
夏樹 4 6	海音……。	泣き崩れている。
海音 4 6	でも、できればもう一つ、贅沢を言わせてください。	

夏樹 4 7	……なんだい？	
海音 4 7	笑ってください。私は、いつも笑顔をくれたあなたが大好きです。だから立ち上がってください。どうか前を向ってください。	あなたの笑顔が私の希望です。 泣きながら無理やり笑ってる。
夏樹 4 8	海音……。	
海音 4 8	夏樹さん。さ、歌いましょう？ 歌で巡り合ったわたし達。だから……。	お別れも歌でしましょうよ。
夏樹 4 9	……しゃー!!どうした江藤夏樹。お前のやりたい事はみんなを元気づける事だろう!目の前の女の子ひとり笑わせないでどうする!うおおー!俺は、いつでも、元気なんだあー!	力を溜めて。空元気。 自分の口にした言葉通り、俺は手の届く限り みんなを元気づけて見せる。
海音 4 9	さすがです、夏樹さん。やっぱりあなたでよかったです。	笑う。
夏樹 5 0	どういう事だい。	
海音 5 0	私の歌は、夏樹さんの心に宿ったみたい。夏樹さん、私の命はあなたの歌に生き続けます。	
夏樹 5 1	……命の歌。	確かめるように。
海音 5 1	夏樹さん、連れて行ってくださいね。あなたの生きる素敵未来へ。	
夏樹 5 2	……分かった。僕は、生きるよ。君との証、絶対に忘れない。	決意して。
海音 5 2	ありがとう!	海音の歌を繋ぐ事。それこそが未練だった。
夏樹 5 3	海音。さあ、歌おう!	
海音 5 3	うん!	
夏樹 5 4	つと、そうだった。ごめん海音!約束の歌、間に合わなかった。	おつとつと。しまった!ごめんなさい!!
海音 5 4	じゃあ、今から二人で作りましょう。私と夏樹さんの世界でたった一つだけ。誰も知る事のない歌を。	からからと爽やかに。

夏樹 5 5	そうだ。君となら作れそうだ。海の彼方まで届くように、二人だけが歌う歌。
海音 5 5	あなたの歌は死の歌で。
夏樹 5 6	きみの歌は生の歌。
夏樹&海音 (同時)	俺 (私) 達に残された時間では、伝えたい想いは語りきれない。
夏樹&海音 (同時)	でも俺 (私) 達は知っている。言葉よりもずっと素直な心の伝え方を。
夏樹&海音 (同時)	歌うのは、夏の日思い出を語る、名も無き二人の海の唄。
M 4 「海のうた」	
夏樹	この歌が聞こえますか？ 青い海に浮かぶ歌が
海音	浜辺であなたは笑ってた その目に映る私も笑った
夏樹	夢のような時間だった 美しかった
海音	心は夜空に羽ばたいて 素敵だった
夏樹	砂につづった旋律も とうに海へ溶けていた
海音	どうか届けて細波よ 私は今も笑ってますと
2 人	海の唄が空へと響く 高く深く果てしなく 海の唄よ奏でて遠く 遠く 届けどこまでも 忘れないよ 何度夏が過ぎようと
海音・台詞	ずっと祈ってます あなたのシアワセを

2人

夏樹・ソロ

ありがとう

(曲中で、夏樹は海音にペンダントを返そうとする。海音は一度受け取るが、それを胸にギョツと抱き、夏樹に再び差し出す。夏樹は受け取り、真つすぐな笑みを浮かべる。海音も安心したような笑顔を見せる。季節がうつろいゆく浜辺に二人の影。やがて、海音の姿は光となって消える。夏樹だけが残る。)

星の海よ 輝け永遠とわに 海原照らす標しるべとなれ

明日の光よ 未来を巡れ 彼方へ響けこの音ねよ

忘れないよ この夏の日の思い出を

ずっと輝いてるよ 君とみた海は

この歌が聞こえますか？ 広い浜に揺れる唄が

歩き続けよう 歌い続けよう また会える日まで

響け

海の唄よ

(ざざ波の音を残して、暗転)

【エピローグ】	(朝日が世界を眩しく照らす。蝉が元気に鳴いている。)	
夏樹 1	それじゃ親父さん、今日までお世話になりました。	荷物も背負った。準備万端。爽やかな気分で。
勝治 1	おう、バイト代はちゃんとしまったか？	
夏樹 2	はい、ばつちりと。一か月間、本当に、ありがとうございました！	気を付けをして、礼するつもりで。
勝治 2	んだよ、かしこまるなよ堅苦しいな。	
夏樹 3	すみません、クソ真面目な俺なので。	前にクソ真面目と言われたのを覚えている。
勝治 3	馬鹿野郎。……風邪ひくなよ？	「馬鹿野郎」笑って。「風邪ひくなよ」渋く。
夏樹 4	……おやさあぁあん！	急に寂しくなってきた。
勝治 4	あぁっ、分かった分かった！ほらっ、早く行かねえとバス出ちまうぞ！	「あーもう抱き着くなバカ！」満更でもない。
夏樹 5	うわっ、そうだった！親父さん、どうかお元気で！	気を取り直して。ハキハキと。
勝治 5	おーう、ビッグになったらまた来いよな！少年、夏樹！	男らしくサッパリと見送る。応援してるぜ！
夏樹モノ 6	朝日が世界を照らしている。蝉の声が残る林を俺は駆けた。曲がりくねった松林はどこも日陰で、吹き抜ける風が心地よい。やがて正面が明るくなり、太陽の下に出た。その先は、真つ青な景色が広がる、海辺の崖。ここからの景色を、もう一度見ておきたかったから。青い空、大きな入道雲、そして果て無く広がる海。	
夏樹 7	見るならやつぱり明るいうちが良いな、うん。	にんまりと。
夏樹モノ 8	一人で納得しながら、ポケットから一枚の紙切れを取り出す。	
夏樹 9	榎本さん、ごめんなさい。	迷いを絶つように。

<p>夏樹 1 0</p> <p>夏樹モノ 1 1</p>	<p>(名刺を破く音)</p> <p>そして、てえいっ！</p> <p>あの晩にもらった名刺を細かく破き、海へ向かって放り投げた。</p>	<p>映画レミゼラブルのプロログのオマージュ</p>
<p>夏樹 1 2</p> <p>夏樹モノ 1 3</p>	<p>(風が吹く音)</p> <p>もう少し、自分の力で頑張らせてください。</p> <p>一陣の風が吹く。宙を舞う紙片はどこまでも舞い上がり、やがて見えなくな</p> <p>った。</p>	<p>海での記憶はなるべく置いていく。決意。</p>
<p>夏樹 1 4</p> <p>夏樹モノ 1 5</p>	<p>あーあ、やつちやつたあ……。つて、感慨にふけってる暇は無いな。うね、バスに遅れる！急げ！</p> <p>海を後にして、再び走り出す。海岸線を吹く風が背中を後押ししてくれる。街へ向かうバスのクラクションがすぐそばに聞こえている。足取りは軽く、気分は良い。再出発には最高の日だ！</p>	
<p>夏樹モノ 1 6</p>	<p>夢は遠いから夢なんだ。誰かが言った。果てが見えない長い道のり。もちろん怖いさ。それでも俺は笑って進んでいこう。汗だくになって、泥だらけになっても足を止めたりしないだろう。旅路は長い方が楽しいものだ。俺はこれから進み続けるよ。この声が、海の向こうに届くまで。</p>	<p>道を駆けながら、夏樹の胸には夏の思い出が巡っている。不思議な夏を過ごした。夢に迷いがあった、自分の心に正直になれなかった。未来に正解を見出せなかった。そんな時もある。</p>

夏樹 17	<p>未来で待ってる俺の夢がこつちに来いと呼んでいる。 どうか、見守っていて欲しい。 そしていつか、また歌おう。</p> <p>さあ、江藤夏樹、頑張ります！</p> <p>(首元で藍色のペンダントがまぶしく光る。 大空を見上げると、高く上る雲の中に、笑ってる少女が見えた気がした。幕)</p>	<p>った。それでも俺は、これからも夢に向かっ てまっすぐ走り続けて行こう。夏の記憶を迎 りながら、夏樹は決意を新たにする。</p> <p>力強い宣言。</p>